

Tsukuba COMMUNICATIONS

Autumn

- 8 鼎談 「キャンパスにおけるアートとデザイン」
- 12 聴 関口 章 教授
- 14 OB&OG 中野 奈津美 氏
- 16 学内組織紹介 大学研究センター
- 18 名物先生登場 中島 寿 主幹教諭(附属小学校)
- 20 Sports Club 男子ハンドボール部
- 22 Art & Culture ストリートダンスサークル「REAL JAM」
- 24 Homeland 中国 浙江省
- 26 TOPICS
- 30 リレーエッセイ
- 32 茗溪会・紫峰会
- 34 新聞掲載・テレビ放送一覧
- 36 イベントカレンダー



対談

イノベーションを生み出す大学へ

前文部科学省事務次官
森口泰孝氏 × 副学長・理事
吉川晃





対談

イノベーションを 生み出す大学へ

前文部科学省事務次官

副学長・理事

森口泰孝氏 × 吉川晃



附属駒場高校の思い出

吉川: 森口さんは、長らく文部科学行政に携われ、この7月まで文部科学事務次官として文部科学省の事務部門を統括されておられました。10月に創立40周年を迎えた本学も、さまざまな面でご指導をいただいてまいりました。今回はそのご経験から、未来に向けて、今後大学はどうあるべきかを中心にお話を伺いたいと思います。森口さんは、本学の附属駒場高校のご出身でもありますので、まず、当時の思い出などをお聞かせください。

森口: 吉川さんも同じく附属駒場高校の

出身ですよ。吉川さんが23期で私が18期ですから、同じ時期に通ったわけではありませんけれども。私は、まだ東京教育大学の附属の時代で、中学・高校と6年間、駒場に通いました。そのころの思い出として記憶に残っているのは、授業や勉強のことではなく、部活動でやっていた野球のことです。6年間やりましたが、中学の時に世田谷区準優勝したこと、高校の時に東京都でベスト16校になるブロック優勝したことが最大の思い出です。当時の東京代表は1校でしたから、今で言えば東京都のベスト8になったようなレベルです。

吉川: でも、残念なことに野球が強かったのは森口さんの時だけだったんですよ。

森口: 次に残る思い出としては、文化祭・音楽祭・体育祭などですね。とても盛んで、クラス対抗だったので熱心に取り組みました。体育祭では、東京教育大学の体育学部の学生さんたちが来て、体操などの模範演技を見せてくれました。これは素晴らしかったです。それから田植えや稲刈り。駒場は農学部附属みたいなのがあって、井の頭線の駒場東大前駅のところに田んぼがあるんですけど、そこで農作業をしたのも記憶に残っています。授業で農学の時間もありました。

吉川: 私の在学時も農学が必修で、農作業もやりました。その水田は有名なケルネル水田というもので、我が国の農学の歴史に、実験の場として名前が残っていることを、後になって知りました。附属駒場高校というと、どうしても学業面がクローズアップされがちですが、生徒の方はむしろ他の活動に一生懸命になっていた印象を持っています。

森口: 東京教育大学から教育実習生もたくさん来ました。まじめで熱心な方が多かったです。その気風が筑波大学にも引き継がれていると思います。

吉川: 附属駒場の生徒の中には抜群に優秀な者もいるので、教える側にとっては実習がやりにくいというようなことはなかったでしょうか。

森口: そんなことはなかったと思います。教育実習生は一生懸命に授業の準備をして、とても熱心に教えてくれていたと

思います。ただ私自身は、部活動で疲れていて眠かったのを覚えています。授業以外でも、休み時間にいろいろな話をしたりしました。それから、ちょうど私が中学に入ったのが昭和39年の東京オリンピックの年だったのですが、駒場の体育館がバレーボールの練習会場になりました。金メダルをとった日本女子チームや当時のソ連のチームなどが練習に来たのを覚えています。とにかく楽しい6年間でした。

優れた頭脳をさらに伸ばす

吉川: 文部科学省とのつながりでいうと、附属駒場高校は最初からSSH(スーパーサイエンスハイスクール)に指定されました。その後も何度か繰り返し指定されて、そのおかげもあると思いますが、さまざまな科学オリンピックに出場する生徒を輩出し続けています。

森口: SSHは、平成13年に科学技術庁と文部省が統合して文部科学省になったときにできた制度で、母校の附属駒場高校もぜひ採択されてほしいと思っていたところ、運よく採択されて非常にうれしかったですね。SSHの仕組みも変遷しましたが、今ではSSHの柱となるような学校になっていると思います。物理・化学・数学などの科学オリンピックでも優秀な成績を収めていますよね。メダルを取った生徒たちが大臣に表敬に来ます。私も何度か同席しましたが、そういう時に後輩がいるというのはとてもうれしいことです。科学の甲子園では、ペーパーテストでは良い成績だったのですが、ものづくりの方があまり良くなかったらしくて、入賞できなかったとか。それも頭でっかちの駒場らしいという気もしますが、今後はそちらの方も鍛えてほしいと思います。

吉川: 確かに附属駒場高校には、私が在籍した当時から、異能の人というか、理数系でとても優れた頭脳を持った人がいました。ただ、そのころはまだ文部省が政策的にバックアップするようなプログラムがなくて、世の中から特別に脚光を浴びるには至っていませんでした。今は駒場だけでなく各地の有名公・

私立高校で科学オリンピックを目指す人を伸ばそうという傾向が強まっていますね。本学でも、物理や生物の分野で、全国の高校生のトップクラスの生徒に集まってもらって切磋琢磨するようなイベントを、毎年夏休みに開催しています。それが科学オリンピックの代表選考的な場にもなっています。

森口: 国際生物学オリンピックは、日本でも開催しましたね。本来の開催国が急遽辞退し、とつぜん日本が開催することになったのですが、その時は筑波大学に大変お世話になりました。

吉川: 2009年に本学を中心に開催されました。また、その後は、日本生物学オリンピックを全国物理コンテストと隔年で開催しています。名誉教授の方を含めて、教員がボランティアで運営を支えています。翌日までに採点をしなければならなかったり、競技以外の催し物もあったりと、運営する側は本当に大変です。

森口: 科学オリンピックでメダルを取った生徒は入試なしで大学に入れたらどうかという話もありますね。単純にはいきませんが、優れた人を優遇していくことは大事です。

吉川: 本学でも、既に国際科学オリンピック特別入試を実施しています。この入試は、国際科学オリンピックに出場した人やその代表者選考会等において一定の成績を収めた人、また、未踏ソフトウェア創造事業の未踏ユースに採択された人を対象とした入試です。まったく試験なしとはいきませんが、本学では特別な才能を持つ学生に着目した多様な入学試験を用意しています。

大学改革に向けて

吉川: ところで、森口さんは文部科学省で大学改革や科学技術振興に携わってこられました。最近の動向についてどのように捉えておられますか。

森口: 大学改革の議論はずっとやってきました。第1次安倍内閣のころの教育再生会議や、昨年の大学改革実行プラン、中教審(中央教育審議会)の答申、現在の安倍内閣における教育再生実行会議などなど、随時いろいろなものがあって、メニューはそろっていると思います。あとは実行の方が鍵です。これらの提言などを大学でいかに実行するかが大事です。個別の課題としては、グローバル化や教育の質保証、競争力強化などがあります。グローバル化では、グローバル30やグローバル人材育成推進事業などの施策があり、筑波大学もそれらにしっかりと取り組んでいると思います。教育の質保証については、大学教育の質的転換ということで、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の体系的な教育課程へと変わっていくことが重要です。筑波大学はもともと学部学科制ではない先進的な仕組みですので、海外との連携も含めてさらに

「見えない壁を取り払い、イノベーション創出を」



よし かわ あきら

吉川 晃

副学長・理事

東京都出身

1975年 東京教育大学附属駒場高等学校卒業

1980年 東京大学法学部卒業

1980年 文部省入省

1999年 在フランス日本国大使館参事官

2006年 文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術総括官

2007年 国立大学法人東京工業大学事務局長

2010年 (独)宇宙航空研究開発機構執行役

2011年 内閣府大臣官房審議官(科学技術政策・イノベーション担当)

2013年 国立大学法人筑波大学副学長・理事

もり ぐち やす たか
森口 泰孝 氏

前文部科学省事務次官

東京都出身

- 1970年 東京教育大学附属駒場高等学校卒業
- 1974年 東京大学工学部機械工学科卒業
- 1976年 〃 大学院工学系研究科修士課程修了
〃 科学技術庁入庁
- 1990年 外務省在ウィーン国際機関日本政府代表部一等書記官
- 2001年 文部科学省大臣官房会計課長
- 2005年 〃 研究開発局長
- 2009年 〃 文部科学審議官(科学技術担当)
- 2012年 〃 文部科学事務次官
- 2013年 〃 退官



「改革メニューを大学でいかに実行するかが鍵です」

発展させてほしいと思います。競争力強化の面では、6月に日本再興戦略というのを政府として出しました。今後10年間に世界大学ランキングのトップ100に10校という目標が掲げられています。それに対応して文部科学省でも来年度以降、いろいろな施策を打ち出していきますので、筑波大学もぜひそうなるべく頑張ってもらいたいと思います。

吉川: 大学としては、それらの政策や戦略に対して、資金を提供していただきさまざまな事業を展開しています。しかし、資金のあるうちは成果を上げられるのですが、その期間が終わった後、事業を維持することが非常に難しいというのがどこの大学でも悩みです。そういった事情が、文部科学省の政策に十分に反映されていない原因の一つではないかと考えています。また、文部科学省の科学技術政策研究所の調査報告でも示されているように、申請作業等に追われて研究にあてる時間がどうしても減りつつ

あって、頑張っている研究者には非常に疲労感があります。そういった状況をなんとか変えなければならないと思います。**森口:** 確かに、いろいろな大学の話を聞くと、競争的資金を獲得すること自体に疲れてしまって、落ち着いた環境で研究や教育ができないということはあるようです。競争も大事ですが、そういう意味では、基盤的経費がしっかり確保されるべきだと思います。どちらかに偏ってしまうのは良くないので、バランスが重要です。学長が指導力を発揮して、競争的資金で成果が上がったものについては学長裁量経費で引き継いでいけるようにするというのもひとつの方法ではないでしょうか。

吉川: 国立大学法人の制度では、独立行政法人の理事長と同様のトップダウンによる運営が学長にも可能な仕組みになっています。学長が経営者として判断し、メリハリのついた経営資源の投入ができるはずなのですが、運営費交付金は、

実質的には人件費の部分がなくて、手を付けにくい面があります。したがって、現場には、学長が経営資源を完全にコントロールしているとは言えない状況があります。

森口: 確かに、予算面で理事長裁量経費がしっかりと確保できる仕組みを、文部科学省としても考える必要があると思います。

つくば地区からの イノベーション創出

吉川: つくば地区にはイノベーションに関連する研究機関が、国立系だけでも30以上あります。本学としてもそれらの機関と連携してイノベーションの創出に貢献したいと考えています。

森口: それだけの機関が集まっているというのは、他にはない、つくば地区の特色ですね。連携大学院などもやりやすいですし、研究面でも特区という形で連携の体制を整えておられますので、

非常に期待しています。第4期科学技術基本計画では、イノベーションの重要性ということで、COI (Center of Innovation) の施策を進めています。また、非競争分野、つまり共通的・基礎的な研究の分野では、企業や大学が情報を共有化していく必要があります。

吉川:ただ、どうしても組織の壁というのがあって、歯がゆい思いをすることがあります。機関間の壁だけでなく、所管する官庁の縦割りの構図もあって、COIのような施策であっても、似たような研究施設が機関ごとに別々にあるなど、必ずしも効率的ではない状況です。省庁の枠組みを超えて、資源を集約して大きな研究施設を作り、そこに産業界も加わって共同研究ができるようにしてはどうか、という意見もあります。現実的には難しいかもしれませんが、そういった見えない壁を取り払うことがイノベーション創出のためには大事だと思います。

森口:その点では、独立行政法人の中の研究開発法人については、大学と連携する上で現行の制度では不自由な面がありますね。独立行政法人は、国よりも民間に任せる方が効率的なものを対象に制度設計されていますから、長期にわたって成果を求められる研究開発法人は少し異なる性格があります。個人的には、各省共通で研究開発法人を使うような制度の方が好ましいと思っています。

吉川:そういう時代が早く来るといいですね。研究開発法人の制度改革が進めば、我々大学の方も仕事がしやすくなります。科学技術基本計画を繙くまでもなく、従来から、若手研究者や女性研究者の登用に加えて、外国人研究者の活躍促進も我が国の課題として挙げられてきました。WPI (World Premier International Research Center Initiative) など研究組織のグローバル化施策も文部科学省によって推進されています。特に人材のグローバル化について、どのくらいの割合で、国立大学や研究開発法人に、外国人研究者を迎え入れたらよいか、国としてビジョンはあるのでしょうか。

森口:外国人の教員や研究者のあるべ



き割合については、各大学の状況によって異なるでしょうから、筑波大学としても議論して目標を定めてください。ただ、日本人、外国人ということ意識し過ぎること自体がむしろ特殊ではないでしょうか。例えばアメリカでは、国籍に関係なく研究活動ができます。日本は、言葉の問題、地理的・文化的なこともあって同じようにはいかないでしょうが、大学の先生も研究者も日本から外国へどんどん行って、また日本に戻ってくる、そういう流動化した社会を目指すべきです。

吉川:日本という社会全体の問題だと言ってしまうとそれまでですが、WPIをやっている大学でも、長崎の出島のようなところはできるのだけれども、全体として国内・外の人材がミックスしていかないといった問題があると聞きます。本学でもWPIをスタートしていますので、それが大学全体のエネルギーになるように、また大学全体がWPI化していくようなシナリオを描いていかななくてはならないと思います。

森口:研究学園都市は外国人も多いで

すから、グローバル化に関してつくばは有利ですね。大学単体ではなく多くの研究機関が近隣にあって交流もしやすいですし。ぜひ先頭を切ってやってください。

吉川:本学は比率的には外国人留学生の割合が最も多い大学の一つです。外国人が生活するという点では、つくば地区は他に比べても遜色ないと思います。ただ、留学生をたくさん受け入れたら、外国人の教員を採用するといったことだけでは、世界の超一流大学の仲間入りは難しいとも感じています。

筑波大学への期待

吉川:さて、本学は今年の10月に開学40周年という節目を迎えました。前身である東京教育大学が101年の歴史を有していましたから、合計すれば141年になります。教育・研究・国際化・産学連携などいろいろな観点があると思いますが、本学に対してどのような期待をお持ちでしょうか。



森口: 私自身が附属駒場の出身ということもあって、筑波大学には以前からシンパシーを感じています。ですから、永田新学長のもと頑張ってもらいたいと思っていますし、実際にいろいろと前向きに取り組んでおられると思います。教育面では、博士課程リーディングプログラムを活用して複数の研究科の横断的な学位プログラムを設置するなど、学位プログラムの推進にしっかり取り組んでいただいていますし、貴大学の策定した国際化戦略基本方針の下での国際戦略への取り組みにも大いに期待しています。研究に関しても、「つくば国際戦略総合特区」の下での研究活動の推進など、世界のトップ100に入る実力は十分にあるのではないのでしょうか。新しいことに取り組むことも大事ですが、現在の取り組みをきちんと続けて成果を出していくことが、今後さらに飛躍するための鍵になると思います。また、体育や芸術もある総合大学ですから、他大学にない特色を出して行ってほしいと思います。

吉川: ありがとうございます。学位プログ

ラム制への取り組みは、学長も就任時の抱負で真っ先に取り上げています。我が国の大学が一様に学位プログラム制に向かうという流れには至っていませんが、世界をリードしているアメリカの大学は学位プログラム制で運営されています。教員の組織と学生の教育のための組織を区分して、時代や社会のニーズに合わせたプログラムを柔軟かつ機敏に展開すること、また、大学のアウトプットとしての学生が本来学ぶべきことを身に着けたという達成度をしっかりと評価した上で卒業させることなどが、この制度の大きな狙いだと考えています。本学はすでに形を整えて、大学全体としてモデルチェンジをしていこうとしています。また、海外の大学と組んで、共同の教育プログラムをやるというような時代も、そう遠くない将来に来ると思います。最後に、現在および未来の学生に対してメッセージをお願いします。

森口: 受け身の学修ではなくて、主体的な学修、自ら考える力をもってほしいと思います。学生諸君には非常にまじめな

印象がありますが、そういう人ほど、どうしても受け身になりがちです。先生の教え方も、単に知識を教えるだけではなくて、考える力を養うような授業をする必要があります。また、何事にも前向きに取り組んでほしいと思います。いろいろな課題に対して、できない理由をたくさん並べる人はいますが、そうではなくて、どうやったらできるのかを考えることが重要です。最近の学生は内向き思考だと言われていますが、私自身は悲観していません。海外留学やインターンシップなど多様な経験活動に積極的に参加し、学生一人一人が「志」を持って生きて行ってほしいと思います。最後に、2020年東京オリンピックが実現することになりました。大変嬉しいニュースでしたが、これからが大変です。招致活動の際にも世界各国に発信してきたことですが、オリンピズム普及のためにスポーツアカデミーを形成しようと考えています。その際は、筑波大学にもいろいろ協力して頂くことがあると思います。よろしくをお願いします。

吉川: どうもありがとうございました。

鼎談

キャンパスにおける アートとデザイン

九州大学副学長

佐藤 優氏

特命教授

西川 潔

芸術系教授

齊藤 泰嘉

大学は今、国際化が強く求められ、優れた学生の招来は急務です。地域の核としての役割も期待され、世界ランキングも視野に入れざるを得ない状況にあります。こうした課題の陰に隠れがちなのが、創造の地に相応しい空間づくりです。数値化できる課題と違って、リフレッシュする空間や美しく安全な環境は評価されにくいものです。アジアや欧米には、建物・ランドスケープとも、その質が著しく高いキャンパスが多くあります。日本でも、次世代を担う若者を世界から迎えるため、また、先端の研究成果をさらに向上させるためにも、キャンパスのあり方の再考は避けられません。

今回は、「アートやデザイン力を駆使した世界で最も魅力的な大学」を目指して建設中の九州大学伊都キャンパスを訪ねた西川潔特命教授と齊藤泰嘉教授に、九州大学の佐藤優副学長と、キャンパスにおけるアートとデザインについて語り合っていました。

西川：今日は、パブリックスペースのデザインを中心に、副学長の佐藤先生自らが案内いただきありがとうございました。引き続き、キャンパスのアートやデザインについて、お話を伺えればと思います。筑波大学で芸術支援学を担当している齊藤教授にも加わっていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。さて、本題に入る前に、佐藤先生がいらした九州芸術工科大学と九州大学の合併について、新キャンパスの計画やデザインに影響しているのではないかと想像しますので、簡単にお話いただけますか。

佐藤：2003年10月に九州大学と九州芸術工科大学が統合しました。旧帝国大学にはじめてデザインの分野が加わったわけです。現在の有川節夫総長は、前梶山千里総長時代に副学長を務め、新キャン

パス計画を担当していました。デザイン分野には殊のほか造詣が深く、芸術工学との統合を機に、技術と感性を融合させた世界に誇るキャンパスづくりを目指したいと主張し、各種委員会の設立やアートのための予算化をしてくださりました。私も統合以来、新キャンパスや九州大学病院のデザイン監修に携わってきました。

西川：そうですね。聞くところによると、この壮大な計画に関わってきた教職員は200人を越えるそうですね。先生が在外研究でドイツに行かれた後でしたか、『パブリックデザイン』という本を出しておられますが、その研究が活かされた訳ですね。

佐藤：計画面では、新キャンパス計画専門委員会パブリックスペースワーキンググループ長として、パブリックスペース・デザインマニュアルの策定を行い、実施面で

は、新キャンパス計画推進室の副室長として、建築家や施設部を結ぶ役割を果たしてきました。つまり、マスタープランと実施の間をつなぎ、設計と現場や利用者との間をつなぐディレクターのような役割です。

西川：確かに、素晴らしいマスタープランも調整者が不在では絵に描いた餅ですね。日本ではこの点がしばしば問題になります。齊藤先生、実際に見学されていかがでしたか。

齊藤：伊都キャンパス全体が、ランド・アートの作品のようで、司馬遼太郎さんの小説「坂の上の雲」を思い出しました。伊都キャンパスの下から坂道を上がっていく。歩くのは大変ですが、坂の上には教室がある。雲というのは司馬遼太郎さんにとっては明治の希望を表す大事なキーワードで、同じように大学の教室や研究棟は、



(写真 1)

九州大学だけでなく日本全体、世界全体の、一つの時代の希望、ユートピアであるべきだと思います。そう考えると、九州大学はアートによる学問の理想郷づくりを目指されているのだと思いました。

西川: キャンパス内に地域の貴重な水源や、多くの遺跡の発見、多様な生物が棲むとのご説明から、大変な場所に建設されているというのが私の第一印象です。しかし、それをバネにして専門家集団が知恵を絞って、まさにサステナブルなキャンパスを目指しておられることに感心しました。アートやデザインは感性が関わるだけに、難しい局面が沢山あったと思います。我が国では、プラスアルファ的な存在に見られがちなアートやデザインをしっかりと計画に組み込み、「九州大学パブリックスペース・デザインマニュアル」(2004)にまでまとめることができたのはなぜですか。

佐藤: 私は筑波大学の計画や立地の問題を乗り越えようとする努力に感服しておりました。本学新キャンパスも似たようなハンディを持っています。海外には郊外に素晴らしいキャンパスがいくつもあるのに、日本ではみんなが憧れるよ

うなキャンパスはごく少ない。そこで、研究や教育、環境の問題はもちろんですが、アートやデザイン力を駆使して世界で最も魅力的な大学にするしかない、と考えました。そこで、15年以上かかる計画を安定運用でき、さらに学内外のコンセンサスを得る方法として公的空間のデザインマニュアルを策定しました。ランドスケープ、植栽、サイン、光環境、アート、ファニチュア、色彩、素材などの分野で、大学の知と第一線の専門家の知を

結集させました。このような項目は、従来は隙間に入って後回しにされがちで、しかも担当者によってバラバラになる可能性がありました。全体を長い期間にわたって統括するマニュアルは、とても大切な存在で、今後のキャンパス計画の参考にもなると思います。

齊藤: 私も造る側と利用者の仲を取り持つコーディネーターの重要性を日々実感しています。専門の芸術支援学はそうした人材の育成も視野に入れていきます。



工学系建物の最上階から東方面を望む。遠くには博多湾が見える

西川:この辺で、少し具体的なお話を伺いたいと思います。大学名が大きく彫り込まれた石(9頁 写真1)は、ゲートと考えていいですか。アートでもありますね。筑波大は30周年でT字型のシンボルゲートをつくりました。



佐藤 優 九州大学副学長

佐藤:東京大学の赤門のような記念写真を撮る拠点をつくりたいと考えました。現代の設計方法では難しい要素のひとつ

です。なぜなら、建物やサインにしかそれを期待できないからです。九州大学の場合は、次第に昇っていく稜線中央の階段に組み込ませて大きな石の記銘サインをつくりました。また、アジアの拠点大学として、漢字の書が不可欠でした。幸いNHKの大河ドラマ「風林火山」の題字を手がけた柿沼康二氏に依頼できました。両翼に学舎と並木、前方に青空が大きく広がる記念写真は、一生誇らしく青春時代を思い出させることでしょう。

西川:ところで、パブリックスペース・デザインコンセプトの中に、UI (university identity) との連携という項目が入っていますね。現在は大学の個性化、コア・コンピタンスの明確化が求められていますが、その意味でも、これはとても大切なことだと思います。シンボルカラーやサブカラーが、実際に空間要素としても使われていますか。

佐藤:環境の色彩は、パブリシティの色彩とは区別していますが、広い意味ではそれもUIです。新キャンパスの造形物の色彩は、箱崎キャンパスの色彩分析の結果から導いた伝統をイメージさせる色と、伊都周辺の土や植物等から導いた環境調和色を使っています。最先端であっても伝統を感じさせ、環境と連続させる。この考え方は、ファニチュアや情報系サインなどにも徹底させています。

齊藤:なるほど。それは直截的に認知されなくても、大学のアイデンティティ強化に大きく貢献しますね。



西川 潔 特命教授

西川:私も同感です。大規模キャンパスは都市づくりに近いとよく言われます。とすれば、統一感とともに変化も必要です。その

辺のお考えはいかがですか。筑波大学では分節化や適度な変化を重視し、ここ数年、高彩度色も若干使うようにしています。この裏には、だいぶ前ですが英国での体験があります。オックスフォード大学のセントキャサリンカレッジ棟はA・ヤコブセンの作で、調度品やランドスケープまでデザインしています。中世の建物に混じった、その脇をよく散歩しました。ケンブリッジではJ・スターリングの超モダンな歴史学部棟を記憶しています。二つとも20世紀を代表する名建築です。最近では、ブリストル郊外の大学(UWE)の学生宿舎に施された多様な外装材の構成が際だって美しかったのが印象的でした(写真2)。キャンパスは多様性を許容する実験都市であると実感しました。

佐藤:九州大学では、黒川紀章氏やシーザー・ペリ日本事務所などが関わっていますが、基本的な考え方やブロック毎の方針を踏襲している限り、設計の自由度を高めています。やはり全体を実験都市と位置づけて、意欲的な試み

にも寛大です。ただし、時代に合わせすぎるとどうでしょうか。予算の問題や担当者の好みを入れるための方便で使われる危険もあります。いずれにしても高い水準の維持をチェックすることが条件になります。

西川:基軸はぶれないということですね。このキャンパスづくりでは、地域の方々や学生との協議や協力が、デザイン面でも積極的に行われたようですが…。

佐藤:1998年に周辺の市町と企業および大学が連携して「九州大学学術研究都市推進協議会」を設立し、さらに2004年に「九州大学学術研究都市推進機構」とし、2013年に公益財団法人として支援体制を整えてきました。また、2007年から「タウン・オン・キャンパスまちづくり推進会議」を設けて、関連自治体や地域の皆さん、大学の教職員・学生、関連企業等約400人と意見交換を行いながら、周辺の地域の景観形成地区指定や、学生による公園設計、住みたい未来型集合住宅の提案、レンタルサイクルの実験や地域の野菜を販売する場所をつくるなど、さまざまな活動をしてきました。

西川:多彩ですね。今日一緒にご案内頂いた新キャンパス計画推進室の坂井猛教授から、このキャンパスづくりそのものを授業にされていて、受講生も多いと伺いました。一線の研究者が最新の成果を持って作り上げつつある実験の場は、確かに理想的教材です。現在は60%程の完成とのことですので、ぜひまた一段成長したころを拝見したいと思います。

佐藤:ぜひお越しく下さい。筑波大学は今年40周年だそうですね。最後に、キャンパスにおけるアートとデザインについて、今筑波大学がどのような取り組みをされているかお聞かせください。



齊藤 泰嘉 芸術系教授

齊藤:筑波大学ならではの試みの一つに、筑波大学アートストリートの整備があります。他の日本の大学には

まだあまり見られないもので、ニューヨークにある「ミュージアム通り」をイメージしたものです。通り



(写真2)ブリストル郊外にある大学(UWE)の学生宿舎。上は南から見上げた宿舎全景。下は北から見た景観。木材、レンガ、白壁の対比が美しい。道を挟んで右側には研究棟が並ぶ



キャンパスモール。樹木が育つと造形的な椅子の利用もふえそう 緩やかな曲線状に並ぶウェストエリアの建物。町並みを意識させる



工学系建物の中央部におかれた自然石のアート。音声も組み込まれている



エントランスホールに設置されたマイケル・リン氏の作品

沿いに美術館が並ぶ「ミュージアム通り」は、みなさんの散策場所になっているし、街の環境を文化的にしているんですね。そういったものを筑波大学の中に再現したい。現在は、けやき通りという学内の通り沿いに、ギャラリーや学生に貸し出すアートスペース、野外彫刻庭園

など8つのアートのスポットが点在しています。私個人の意見ですが、今後は、バスでも通っても芸術的な雰囲気を感じられるように、通り沿いに野外彫刻を置いたり、芸術の制作現場が外から見えるようにするといった整備をしていきたいと思っています。

佐藤: ぜひ、40周年を迎えた筑波大学のキャンパスやアートストリートを拝見したいです。

西川: どうぞいらしてください。お待ちしております。今日は、ありがとうございました。

鼎談を終えて ～改めて筑波大学を散策!～

齊藤泰嘉 (芸術系教授 芸術支援学)

「隠れたカリキュラム」という言葉がある。教室で語られる「現れたカリキュラム」とは別に、桜吹雪に始まる四季折々の自然の美しさなどがその一つであり、それは、学生たちの無意識の世界を浄化する。若者たちが、新しい知識を得る前に必要なのは、大学という場所に心を開くことだと思う。水と緑に恵まれた筑波大学のキャンパスは、その全体が豊かな「隠れたカリキュラム」である。

さらに、本学のキャンパスには30点もの野外彫刻やモニュメントが点在しており、自然と共鳴しながら、人間の悲しみや希望の物語を静かに語りかけている。こうしたキャンパス・アートも「隠れたカリキュラム」の一つである。附属病院の庭を飾る伊藤鈞《子供の四季》や中央図書館前広場に立つ中村晋也《Miserere XVII 1999》などの野外彫刻を訪ねて歩いてほしい。

美と芸術の前で足をとめ、こころを動かそう。

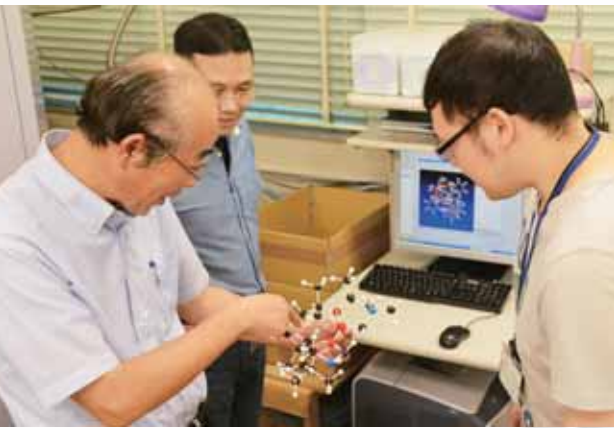


中村晋也《Miserere XVII 1999》

この研究が実を結んだのは23年後、2003年のクリスマスのことでした。それまで、アセチレンに見られるように、多重結合における原子間の電子分布は対称的であると考えられていましたが、むしろその方が稀であって、本来は非対称であるという概念を初めて提唱し、実際に、安定なジシリンの合成に成功、実験的にこの概念を証明したのです。

化学の歴史に名を刻む

ジシリル合成のニュースは、従来の化学結合論を覆すものとして、サイエンス誌や化学の専門誌はもとより、ニューヨークタイムズなどの一般紙も含めて世界中に伝えられました。この業績は化学の教科書を書き換えました。その中でもよく知られている「Organometallics」(Wiley-VCH発行、2006年版)では化学年表にも記載され、化学研究の歴史に新たなマイルストーンを築きました。



科学の進歩や新たな発見によって教科書が書き換わることはあり得ないことではありません。しかし、化学結合のような基本的な概念が変わるといえるのは、それに関連する研究すべてに影響を及ぼすわけですから、とても重大な出来事です。

新タイプの蓄電池へ

研究生生活のほとんどの時間をつぎ込んだジシリル合成の研究では、その過程でも重要な研究成果が生まれています。ゲルマニウムやケイ素のカチオン(陽イオン)を合成したことです。これらも1980年代から存在の可能性が盛んに議論されていましたが、この研究が1997年にサイエンス誌に掲載され、論争に終止符が打たれました。

カチオンが電子1個を受け取るとラジカルに、ラジカルが電子1個を受け取るとアニオン(陰イオン)になります。ケイ素の場合、この反応は電子のやりとりによって容易に、しかも可逆的に起こり、それぞれの状態が安定的に存在できます。そこで現在は、企業と共同で、この性質を利用した蓄電池(ラジカル電池)の開発に取り組んでいます。

パソコンやハイブリッド車などに使われるリチウムイオン電池は、長時間使用ができる反面、出力を上げると発火の危険があります。一方、ケイ素ラジカル電池は、電子の移動だけで反応が進むので充電が速く、安全に大出力が得られることから、新しいタイプの蓄電池として期待されています。

大学は「共育」の場

基礎化学の魅力は、たったひとつの分子で世界を変えられること。そのチャンスは誰にでもあります。今までなかったものをつくる。ナイロンやポリアセチレンがそうだったように、そこから無限の応用が拓け、飛躍的な技術革新がもたらされるのも夢ではないのです。

しかしひとりでするを実現することはできません。先述の蓄電池開発もそうですが、基礎研究に携わる人こそ、その成果を活用できる分野の人々とのコラボ

レーションが大切です。化学そのものの学問的な面白さもありますが、自分の研究フィールドだけに閉じてしまうと、新しい知識や考え方に触れることができず、貴重なチャンスを見逃してしまいます。

その意味では学生の力も不可欠です。同じ研究者として学生から学ぶこともたくさんあります。大学は教員と学生が共に成長する場所。「教育」ではなく「共育」だと考えています。ひとつだけ学生にアドバイスするとすれば、教科書に書いてあることがすべてではないということ。それはいつでも覆る可能性があるのです。



聴

関口 章 教授 (数理物質系)

ひとつの分子が世界を変える 基礎化学はチャンスに満ちた世界

有機ケイ素化合物―特殊な物質のように思えますが、シリコーンといえば誰でも想像がつくでしょう。クッション材、潤滑油、コーティング剤といった汎用品から電子部材や医療用などの高機能素材まで、現代社会に不可欠な物質です。そのカギとなる元素がケイ素。数理物質系の関口章教授は、有機ケイ素化合物の研究を通して、化学結合論において教科書を書き換えるほどの大きなブレイクスルーをもたらし、今もなお、その新たな可能性に挑み続けています。

実はとても身近な元素、ケイ素

地球の表層部、つまり生物の生活圏内で一番多い元素は酸素、次がケイ素です。地殻を構成する岩石の主成分はケイ素で、酸素と結合した状態で存在しています。人類は岩石を使って道具を作り発展してきました。そう考えると、人間とケイ素は人類誕生以来の長い付き合いだといえます。

しかし、人間がケイ素を本当に有効な

23年かかった ケイ素―ケイ素三重結合

元素周期表を見ると、ケイ素は炭素と同じ族(第14族元素)です。一般に、同族の元素はよく似た化学的性質を持っていますが、ケイ素と炭素は全く異なる挙動を示します。そのひとつが多重結合の生成。炭素の場合は、炭素同士で二重結合や三重結合をつくり、エチレンやアセチレンがでます。しかしケイ素は原子半径が大きいく結合距離が長いことから、多重結合は形成できないというのが常識でした。

ところが1981年にアメリカで、ケイ素同士の二重結合が合成されるという大きなブレイクスルーがありました。これが、ケイ素同士の三重結合(ジシリル)実現への挑戦を始めるきっかけです。三重結合は、高分子や環状化合物など、さまざまな化合物を合成するための出発となる化学結合です。そこにケイ素が含まれることで、新しい材料開発の可能性が格段に広がります。

せきぐち あきら 関口 章 教授 (数理物質系)

1952年 群馬県 生まれ
1974年 群馬大学工学部応用化学科 卒業
1978年 筑波大学研究協力部研究協力課文部技官
1981年 〃 化学系助手(理学博士)
1985年 米国ウィスコンシン大学化学科 博士研究員
1987年 東北大学理学部 助教授
1996年 筑波大学化学系 教授
2004年 〃 大学院数理物質科学研究科教授
2011年 〃 数理物質系・化学域 教授
〃 学際物質科学研究センター 教授(兼任)
2012年 ケイ素化学協会 会長

[主な受賞]
IBM科学賞・フンボルト賞・アメリカ化学会賞・
日本化学会賞



1986年に本学芸術専門学群を卒業後、高島屋の美術関連部門でご活躍されてきた中野奈津美さん。今回は、本年2月に、高島屋執行役員・人事部長に就任され、社内外から注目を集めている中野さんのお話を伺いました。



なか の な つ み
中野奈津美さん

株式会社高島屋 執行役員 人事部長

1986年3月 筑波大学芸術専門学群卒業
1986年4月 株式会社 高島屋入社
2013年2月 株式会社 高島屋 執行役員 人事部長 就任



— 本学の芸術専門学群に入学された理由から聞かせてください。

母が書家で、3歳から習字を教えてもらったこと、美術好きの父には、幼稚園児の頃から美術館に連れて行かれ、中学生にもなると展覧会を観ることが習慣になり、美術史に興味湧くようになったというのが、筑波大学を選んだ大きな理由です。他の美術大学には書のコースがありませんでしたし、美術史は文学部の系列に入っている大学が多い。どちらも芸術専門学群で学べる筑波大学は魅力的でした。1～2年の課程では、書道も美術史も両方学びました。専攻は、入学時は書コースで、1年後に美術史コースに転向しましたが、書道も大学を卒業する頃までは続けていました。



— 大学で特に印象に残っていることは何ですか？

筑波大では、どの学群の何の授業でもたいてい受講できるでしょう。その自由さが筑波大の懐の深さだと思っています。いろいろと受講できて、楽しくて仕方がなかったですね。私は卒業までに、必要単位のほぼ倍を取っています。学芸員と美術ではなく社会科の教員免許を取ったということもありますが、あの頃は勉強が好きでした(笑)。印象に残っているのは、国立西洋美術館の館長から文化庁長官になられた青柳正規先生の講義です。話も面白ければ、声も素敵で…。ものすごく人気があり、当時、先生が担当していた芸術学専攻の学生は全員合わせて30人もいないはずなのに、いつも500人ほどの学生が聴講していました。

— 高島屋に入社されたきっかけは？

その青柳先生と学外演習で都内の美術館を巡った際、日本橋高島屋の「コートールド・コレクション展」にも行きました。ロンドン大学の所蔵ですが、当時でもあれほど有名なコレクションを百貨店で

展覧するのは、非常に珍しいことでしたし、作品も素晴らしかった。就職課に相談に行くと、高島屋を勧められた時に、その時のことを思い出し、「美術展の仕事ができるかもしれない」と、入社試験を受けました。

— 入社後はどのようなお仕事をされましたか？

新入社員は、まず販売現場に配属されます。私は、学芸員の資格を持っていたことが決め手になって、美術品を販売する部門に配属されました。バブル前から絶頂期を経て、終焉するまでの7年間で、3つある画廊では毎週のように企画展を開催し、作品を販売することを通じてお客様に美の橋渡しをしていました。お客様に喜んでいただいて、販売がとても楽しかった。当時は作家から直接作品をいただく機会も多く、売れない時のリスクも大きいものでしたが…。最初は数万円の版画の販売から始まって、バブル期には、億単位の販売まで経験させていただきました。筑波大で美術史を勉強し学芸員の資格も取得していましたが、20代の私からでも、お客様に作品を買っていた

だけ。お客様の信用を得た理由の一つには、もちろん筑波大のおかげがあります。ただ、自分でもお客様の嗜好に合わせて努力はしました。お客様宅に行けば必ず、床の間に誰の作品が飾ってあったとか、どこの壁が空いていたとかチェックしていました。休みの日も、必要と思っただけの画廊や展覧会には出かけていましたね。

— とても精力的にお仕事をされてきた様子が伝わってきます。人事部に異動になるまで、美術展のお仕事をされていたそうですが？

美術部から法人外部へ異動となり、広報やタカシマヤ文化基金の担当などを経験しました。営業企画部に異動した頃にはすっかり美術との縁がなくなったと思っていたのですが、入社から20年を経て入社志望の文化催事担当として宣伝部に配属されました。年間10本以上の展覧会を企画・開催していましたが、東日本大震災の津波で消失した六角堂をテーマに企画した「五浦六角堂 再建記念 五浦と岡倉天心の遺産展」は最後の企画だったこともあり、今でも強く印象に残っています。楽しかったですよ。もうちょっと続けていたかったというのが本音です(笑)。

— 昨年、人事部副部長になられ、本年2月1日に執行役員、人事部長に大抜擢されたわけですね。女性の人事部長ということ、大変クローズアップされています。

今、高島屋の正社員は女性が半数を超えました。有期雇用社員を加えれば女性が従業員の7割を占める会社です。お客様も、8割以上が女性ですから、そういった意味では必然なのかもしれません。ただ、過去の人事部長は男性がほとんどを占め、人事経験者の就任が当たり前だったので、正直驚きました。新しい発想で人事に風穴を開け、組織の風通しをよくしたいという社長の考えもあり、「人事が変わったと言われるようにすること」が私のミッションです。重い課題です。

— 高島屋は、今、どのような人材を求めていますか？

中国とASEANという2軸の海外戦略や、日本橋の再開発計画もありますので、多様な人材に入社して欲しい。中でも特に、美術系、理系、体育会系の学生と留学生。筑波大には、どの分野も当てはまるので、活躍している卒業生がたくさんいますよ。

— 面接の時に人を選ぶポイントがあったら教えてください。

面接担当者には、質問の答えを深彫りするよう指示しています。答えには理由があるわけだから、その理由を伝えて欲しい。その結果として、その人自身が見えてくる。本当に弊社が求める人材かどうか分かってきます。面接では、緊張の余り泣いてしまう人もいます。泣いたから不合格ということはありませんけれど、意思是伝えて欲しい。私は、個人面接、グループ面接などを経た最終の面接を担当します。そこでは「素直さ」「感動できる心」を重視しています。若い時は一つでも多くの物事を吸収して欲しいし、視野もどんどん広げて欲しい。それを意識していれば、社会人になって、いろいろな仕事を経験し、お客様と一緒に働く仲間などたくさんの人と出会う中で、視野が広がり、自分が満足する仕事ができるようになっていきます。そうした「心」を是非大切にしてください。

— 最後に、筑波大生に一言メッセージをお願いします。

後から思えば本当に短い大学生活です。自分の可能性を低く捉えないで、「自分にチャンスがある」ことを忘れずに、いろいろなことにチャレンジして欲しい。そして、自分の世界を広げる努力をしてください。筑波大学には、留学生を始め違う価値観を持った人がたくさんいます。あらためて周りを見渡すことも大切です。いろいろな国から来た留学生と仲良くなる、それも一つのきっかけではないでしょうか。



つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

大学研究センター

Research Center for University Studies

Introduce

大学研究センターは、日本の高等教育や大学の在り方について学術的な研究を行う、全国でも数少ない研究拠点のひとつで、1986年に東京キャンパスに設立されました。筑波大学で初の履修証明プログラム「大学マネジメント人材養成」を開発し、これからの大学運営を担う専門人材としての実務家の育成にも注力しています。

大学研究センターのスタッフ

センター長	吉武 博通(経営管理、企業統治、大学経営)
教授	金子 元久(高等教育制度・政策、大学教育、比較高等教育)
准教授	加藤 毅(高等教育・学術政策、社会調査方法論)
准教授	佐野 享子(人材開発・組織開発、教育経営学)
講師	稲永 由紀(教育社会学、高等教育・継続教育論)
研究員	山岸 直司(高等教育)
専門職員	菊池 秀子(センター事務統括)
技術補佐員	白井 朝子(大学マネジメント人材養成担当)
技術補佐員	滝之入 恵(大学マネジメント人材養成担当)



大学を研究するとは

大学研究センターは、高等教育やそれを担う大学のあり方、それらに関連する政策などを研究対象とする組織です。歴史も規模も違いますが、広島大学の高等教育研究開発センターが西の拠点だとすれば、大学研究センターは東の拠点といえます。研究方法としては、質問紙調査などによる実証研究もありますし、諸外国の制度や政策との比較もあります。

重要なことは、研究のための研究に終わらせるのではなく、政策への反映や個々の大学の改革への取り組みに活かしてもらえるような研究成果を生み出すという点です。そのためには、実施可能なモデルを開発するところまで担う必要があります。だから、最も多くの大学が集まる首都圏に位置する利点を活かし、大学の役員や教職員、企業関係者、政策担当者などと密接に連携をとり合うことが大切になります。

センターには4人の専任教員がおり、それぞれに専門の異なる研究者が集まっているのが特徴です。運営方針としては、

①個々の教員がそれぞれ学術的・社会的に意義のある研究成果を生み出すこと、②センター全体で共同して社会的要請の高い研究に取り組むこと、③それらの研究成果を積極的に発信するとともに、実施可能なモデルを開発して社会に還元すること、④それらの成果を基に筑波大学の教育研究や経営の高度化に貢献すること、の4点です。

これらの方針に対して実際の成果はなお不十分な面もありますが、全ての専任教員が毎年、科学研究費補助金を申請し、全員が常に自分で競争的資金を確保しながら研究を進めている点は評価できると思います。

大学マネジメント 人材養成プログラム

知の共同体といわれた大学も、組織体としてのマネジメントが今まで以上に求められています。理事会・役員会を中心とする法人経営、学長を中心とする教学運営、学部長・研究科長を中心とする部局運営

など、大学の至る所でマネジメントが必要になっています。教育もこれまでは個々の教員に依存する部分が大きかった訳ですが、組織全体で教育の質を高める取り組みも求められています。研究も専門を超えたプロジェクト研究などの占めるウェートが増えています。

大学においては、学生や教員個々の興味関心、そのベースとなる自由が尊重されなければなりません。そのことを十分に踏まえた上で、それらと調和させながら、真のマネジメントをどう根付かせるか。そのためにも、大学におけるマネジメントを理論的・体系的に整理し、それにふさわしい方法を開発し、それを担う人材を計画的に育成する必要がありますと考えています。

本センターは、かねてより大学職員を中心にさまざまな学びの機会を提供してきました。それらの実績の上にモデル開発を行ったのが「大学マネジメント人材養成プログラム」です。本プログラムは、筑波大学が提供する最初の履修証明プログラムとして、平成21年度からスタートしました。120時間の履修を終えた者には、厳格な修了

認定を経て、学長名の修了証明が付与されます。

主な受講者は首都圏の国公立の大学職員ですが、職場から派遣されるケースもあり、いくつかの大学では人事研修の一環として活用されています。開講以来、半期ごとに10数人の受講者を受け入れ、これまでに60人の修了者を輩出しています。その多くは、大学運営の現場で意欲的に活躍しており、キャリアアップにもつながるなど、カリキュラムの実効性も高く評価されています。

本センターの加藤毅准教授が中心となって、上杉道世元東京大学理事、村上義紀元早稲田大学副総長・常任理事、横田利久中央大学部長など、大学マネジメントや職員育成に深い見識と情熱を持つ方々の協力をいただき、プログラムを開発・推進してきました。講師にはセンター教員以外にも、広く学外の研究者や実務家にお願ひし、最高水準のプログラムを提供できていると自負しております。東京に拠点を置くからこそ可能になった面もあるので、昨年からの一つである大学マネジメントセミナーを遠隔地の大学に同時配信し、双方向で参加いただいております。

真の大学改革に向けて

この20年ほど、大学改革ということが言われ続けています。確かに大学は変化していますが、それ以上に社会は大きく急速に変化しています。そのような中で、大学の競争力をどう捉えるか。個々の教員の教育研究活動がしっかりしていること、教育研究の高度化に向けた組織的取り組みが行われていること、大学全体が有効かつ効率的に運営されていること、などを総合的に見ていかなければ、大学をより良い形にしていくことにつながりません。国立大学が法人化されてちょうど10年。その成果や課題を評価するには良いタイミングです。個々の教員の専門や経験を活かし、学外の研究者・実務家とも連携して、より学術的・客観的な方法で法人化の成果と課題を明らかにするような研究にも取り組んでいきたいと考えています。(吉武博通センター長 談)

講師および受講者から

履修証明プログラムは、セミナー、講義、ワークショップ、フィールド調査、課題研究から構成されており、いずれも現役の大学職員には興味深く刺激的です。特に課題研究は、初回に受講生が自ら提案する課題についてプレゼンし、私を初めとした講師陣からの質問やコメントを浴び、教員との数回のワークショップで鍛えられた後、最終回の成果発表プレゼンは内容もやり方も見違えるほどの進歩を示す人が多く見られます。現場からの問題意識を育て、論理とデータと実践の知恵から解決策を作り上げるのはチャレンジングな学習です。昨年から、公開で行うセミナーのうち1回は、履修証明プログラム修了者3人に登場してもらっており、大学での創意工夫ある活動の紹介と当日の堂々たる発表は毎回100人を越える聴衆の拍手を受けています。大学研究センターの履修証明プログラムは、大学職員の成長の豊かな契機となっています。(講師/元東京大学理事 上杉道世氏)



課題研究プレゼンの様子

VCS配信を利用し、【筑波大学大学マネジメントセミナー】に平成24年度秋実施のセミナーから、茨城大学職員が参加させていただいております。毎回、講師の実体験に基づく業務改善の成功体験や自己啓発の様子など、興味深い講演を拝聴させていただくことで、本学職員の資質向上を目指しています。公共交通機関を利用し、東京まで行くとなると片道2時間以上ですが、VCS配信のおかげで毎回15名~20名の職員がセミナーに参加できることは、大変ありがたいことと感じています。東京会場や他の遠隔地大学からセミナーに参加されている受講者の多くは意識の高い方ばかりで、とても良い刺激を受けております。(受講者/茨城大学総務部 平澤優子さん)



TV会議システム配信の様子

鹿児島大学では、平成24年5月から、過去3回に渡り、大学マネジメントセミナーに参加させていただいております。鹿児島という土地柄、経費や時間の関係で、関東地方で行われる講習会等に参加できない状況でしたが、筑波大学大学研究センターのご協力の下、遠隔講義にて参加できるようになりました。大学マネジメントセミナーの講義では、さまざまな観点から他の大学の取り組み、問題等を聴くことができ、職員の役割として、教員や学生のサポートをしていく良き取り組みを聴くことができました。今後も、こういう機会を提供していただくことで、職員の意識改革の大切さ、大学全体を考えることの大切さを意識して、業務の中に取り込み、自己研鑽に励みたいと考えております。(受講者/鹿児島大学総務部 本田敏幸さん)



受講生とスタッフ

附属学校の 名物先生登場!

11

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。



今回の先生

附属小学校

なか

じま

ひさし

中島 寿 主幹教諭

Profile

埼玉県生まれ。武蔵野音楽大学音楽学部器楽科(ヴァイオリン専攻)卒業。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学留学。公立中学校、高等学校、養護学校での勤務を経て、現在、附属小学校主幹教諭。筑波大学非常勤講師、日本女子大学非常勤講師を併任。著書:「音楽つくって表現する」「音楽のなぞ」等。

歌のテストやリコーダーの練習、それに作曲家の肖像画…そのあたりが小学校での音楽の授業の定番イメージではないだろうか。もしそうなら、中島先生の授業は冒頭から驚きの連続だ。

3年生のクラスが音楽室に集まってくる。先生がおもむろにピアノを弾き始めると、子どもたちは一斉に歌いだし、広いスペースに出て行って、肩につかまって列を作る。ジャンケンをしなが、その列が互いにつながって伸びていく。曲の調子に合わせて歩く速さや動作も自在に変化する。授業の導入として1年生の頃から続けている活動で、言葉の指示がなくても先生とクラスの息はピッタリだ。

ただのお遊戯のように見えるが、この活動には音楽にとって大切なポイントが

含まれている。ひとつは、ルールを守ること。長調と短調の違いや、テンポの変化を意識し、それを体の動きや表情とどう結びつけるかを考えることで、音楽的なルールや、仲間と協調するためのルールを学ぶことができる。もうひとつは、体を動かすこと。曲やリズムに合わせて体を動かしながら、表現の仕方を子供たち自身で発見する。教えられた理屈や方法ではなく、自分の感覚をもとに音楽への親しみを育てていく。

それから子どもたちは輪になって座り、不思議なフレーズを唸り始める。長唄だ。これは中島先生の新しい試み。音楽の指導要領では、日本の音楽、歌舞伎や狂言なども取り入れるようになっているが、長唄というのは独特だ。歌詞の意味

がわからなくてもかまわない。子どもたちは音として覚え、三味線を弾く格好をしながら歌う。ここで大事なことは真似をすること。真似するためにはよく聴かなくてはならない。それは音楽の原点だ。特に日本の古典音楽は、師匠から弟子へ口伝で伝承されていく真似の文化。音や動作を真似するという体験が、長唄への興味を駆り立てる。

音楽の授業では歌唱や器楽演奏に時間が割かれがちだが、「鑑賞」も重要な要素だ。音楽の時間に、いわゆる「名曲」を聴いたという人は多いだろうが、どれほどその曲に共感し、楽しめていたのだろうか。「指揮者の身振りなどを実際にやってみると、自分なりの表現や演奏の好き嫌いがわかってきます。自分ならどう





演奏するか、体験や感情と結びつけながら聴くと、同じ曲が全く違って聞こえてくる。それが音楽鑑賞のおもしろさです。音楽に合わせて体を動かすことは、自分と音楽との接点を見つけるきっかけになる。授業導入の音楽遊びや長唄もそのための仕掛けだ。

授業ではもちろんリコーダーの学習もある。けれどもその方法はとてもシンプルだ。まず「ラ」だけを吹く。先生が弾くピアノ伴奏に合わせて、その1音だけのメロディーを吹く。単音のメロディーだが、ピアノとの美しいアンサンブルができあがる。これなら指使いを間違える心配もなく、リコーダー学習で最も大切な「タンギング」（舌を用いる奏法）と「息の使い方」に集中できる。

次のステップはミッキーマウスマーチ。先生の伴奏に、リコーダーでメロディーを入れる。決して難しい曲ではないが、合奏曲のパートということで、ところどころ、演奏しない部分や主旋律とは異なるメロディーもあって気が抜けない。タイミングが



ずれたり、ふざけてわざと間違える子もある。しかし何度か続けると、最後は全員がピタッと合って曲が終わる。この瞬間の気持ちよさは、みんなで演奏するからこそ味わえるものだ。だから適当なところで妥協せず、納得いくまでやり通す。打楽器なども加わった合奏の完成が待ち遠しい。

「学校の音楽でいちばん重要なのは、みんなで一緒にやるということ。歌や楽器の演奏スキルや音楽の感じ方には個人差があって、それを評価することはできません。同じリコーダーの練習でも、苦手な子は少し頑張れば必ずできるようになる、うまくできる子は「合わせること」を目標にする、というように、それぞれのレベルに応じた課題設定をすると、みんなが達成感を得られる。そうやって全員参加で創り上げるところに、習い事としての音楽とは違う、学校の音楽の意義があると思います」。

中島先生は、音楽づくりの教育にも熱心だ。作曲というと大げさかもしれないが、手をたたく、人とは違う音を出す、という程度のことで、みんなで合わせ

ると立派なアンサンブルになる。それを、繰り返し、問いと答え、音の重なり、といった音楽的な構造に沿って組み立て、さらに体の動きもつけると、リズムとパフォーマンスの独創的な作品ができあがる。高学年では、声や楽器なども入った、さらに豊かな音楽づくりに発展する。これも学校の音楽ならではのアプローチ、みんなでやる音楽だ。

図工や算数といった他教科とのコラボレーションや音楽づくりのワークショップなど、さまざまなスタイルの教材開発にも取り組む。「音楽は本来、気持ちを伝えたり表現するためのコミュニケーションツールであり、優劣をつけるものではありません。音楽の中だけにとまらず、色・形・数字など異なるものと組み合わせたり、いろいろな人と協力することで、発想や創造の可能性を広げることができます。音楽の授業がつまらないとすれば、そのことが忘れられてしまっているから。みんな音楽が大好きなはずです」。中島先生の授業は、音楽の根源的なおもしろさに触れ、感受性の扉を開いてくれる。



細水保宏 副校長

中島寿先生と言えば、背筋をピッと伸ばしてタクトを振っている姿がまず思い浮かびます。それもそのはず、専門が「ヴァイオリンと指揮」という音楽の先生です。特に「鑑賞教育」「音楽づくり」の指導法の研究をされています。校外でも、オーケストラや合唱の指揮者として、また、教師のための「指揮法」の講師としても活躍されています。公立学校に勤務した後、平成元年に本校

に赴任してきたベテラン教員です。筑波大学非常勤講師を併任、音楽の教科書の著者でもあります。座右の銘は「シンプル・イズ・ベスト」「名作は自分が決める」。優しさの中に、決めたことをやり通す強さを感じる先生です。中島先生の周りにはいつも子どもたちがいます。その魅力ある人柄と授業は、身の回りの人たちに安心感と温かさ、そして音楽の素晴らしさを与えてくれています。

「リーグNo.1の守備力」と 「夏に鍛えた攻撃力」で 勝つ!!



現在、秋のリーグ戦で熱戦を繰り広げている男子ハンドボール部。2012年春に藤本元監督を迎え、昨年春のリーグ戦は7位、秋は5位、本年度の春は3位と上り調子。秋のリーグ戦で力を蓄え、インカレ優勝を狙う。

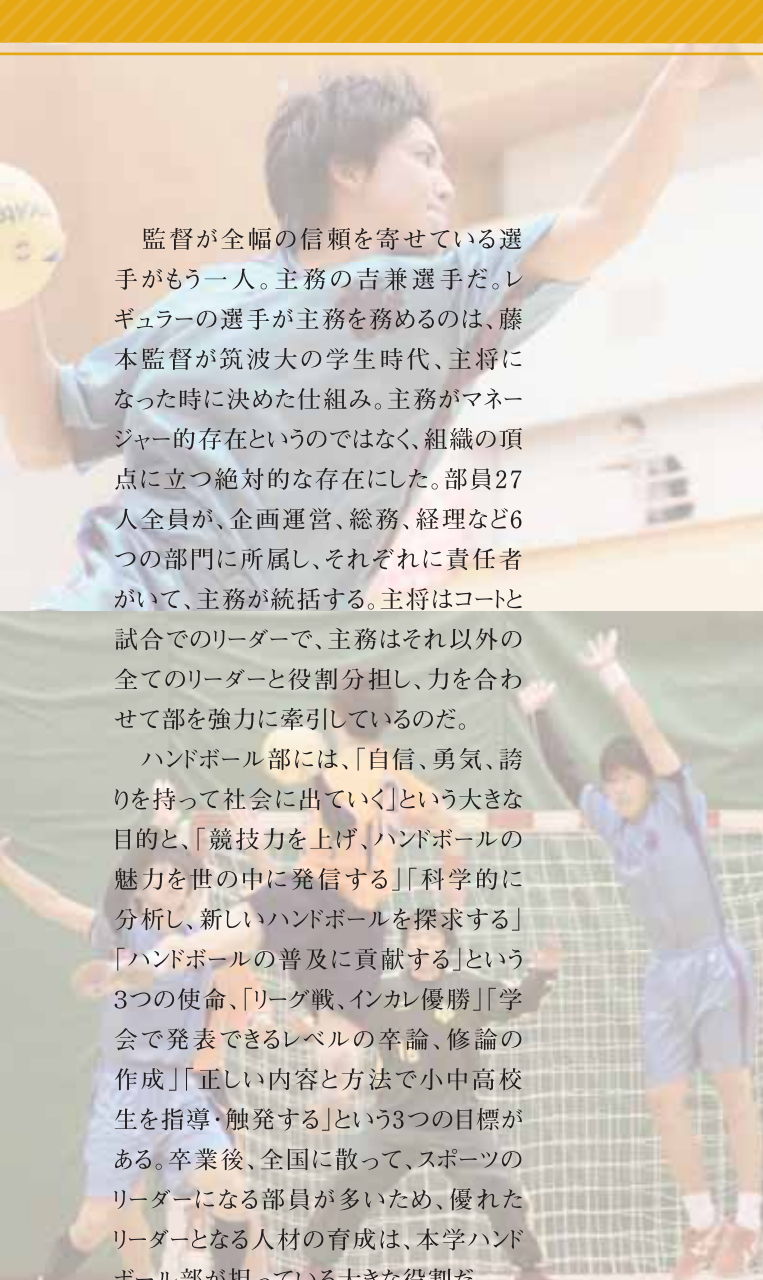
この春のリーグ戦は接戦が多かった。上位2チームに対しても3点差の惜敗、引き分けと、ほぼ互角の戦いだったが、勝利したチームとも点差は少なかった。4位、5位のチームとは、なんと、どちらも残り1秒で山手就策主将(体育専門学群4年)がシュートを決めての勝利だった。

「得点は全体の5位だが、失点が一番少ない。だんだんチームの力がついてきて、失点を防ぎながら、粘り強く戦えるようになった。頂点に食らいついて行くための土台ができた状態」と藤本監督。山手主将は、「去年までは、接戦の末負けるという試合が多かった。この春は、接戦の試合に勝ち切れたり、点差が開いても3点差まで追い付いたり…もう少し得点力を上げれば秋には優勝できるという手応えを感じたので、この夏は、攻撃力アップに取組んだ」。

優秀選手賞を獲得したエース八巻雄一選手(同4年)、藤本監督が「優秀選手賞をもらってもいいくらいの活躍をした」と認める山手主将、得点数チーム2位の吉兼錬選手(同4年)、特別賞を獲得した守護神・加藤芳規選手(同3年)ら固定メンバーで戦い抜いた春リーグだった。

秋のリーグ戦やインカレは、試合間隔が短いこともあり、固定メンバーでは勝ち切れない。そのため、ユースの世界選手権に出場した2人の1年生選手などを含め、この夏は選手全員のレベルアップを図り、準備も整った。

練習方針やメニューについて、「提案はするが主将に意見があれば尊重する」という藤本監督は、主将にはキャプテンシーが大切で、「全ての責任は自分にある」というくらいの姿勢を期待している。「山手は、試合のタイムの時に、ちゃんとこっちでやるから(監督は来なくて)大丈夫、なんて言うこともある。そういうところがいい」と笑う。



監督が全幅の信頼を寄せている選手がもう一人。主務の吉兼選手だ。レギュラーの選手が主務を務めるのは、藤本監督が筑波大の学生時代、主将になった時に決めた仕組み。主務がマネージャー的存在というのではなく、組織の頂点に立つ絶対的な存在にした。部員27人全員が、企画運営、総務、経理など6つの部門に所属し、それぞれに責任者がいて、主務が統括する。主将はコートと試合でのリーダーで、主務はそれ以外の全てのリーダーと役割分担し、力を合わせて部を強力に牽引しているのだ。

ハンドボール部には、「自信、勇気、誇りを持って社会に出ていく」という大きな目的と、「競技力を上げ、ハンドボールの魅力世の中に発信する」「科学的に分析し、新しいハンドボールを探求する」「ハンドボールの普及に貢献する」という3つの使命、「リーグ戦、インカレ優勝」「学会で発表できるレベルの卒論、修論の作成」「正しい内容と方法で小中高校生を指導・触発する」という3つの目標がある。卒業後、全国に散って、スポーツのリーダーになる部員が多いため、優れたリーダーとなる人材の育成は、本学ハンドボール部が担っている大きな役割だ。

そうした人材の育成とハンドボールの普及活動のために、同部では、市内の小中学生対象のハンドボールクラブに、毎週1回指導に行ったり、毎年夏休みに「ハンドボールフェスタ」を開催したりしている。4日間にわたる「ハンドボールフェスタ」には、全国から400～450人の小中高校生が集まる。その多くは、同部OBが監督をしているチームだ。部員の指導者教育のため、その監督方に、部員が子どもたちを指導する様子を評価してもらったりもする。

藤本監督は、「こぢんまりとしたリーダーじゃなく、いろいろなことを経験した視野があって、活力にあふれ、何かを変えていけるようなリーダーを育てたい」と力を込めて語った。



Information

前身の師範学校から140年を越える歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】 <http://www.sports.tsukuba.ac.jp/>
 【筑波大学体育会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

ハンドボール部

平成25年度全日本学生ハンドボール選手権大会 11/23～27 小瀬スポーツ公園体育館他

バドミントン部

■ 第56回東日本学生バドミントン選手権大会

【女子団体】第3位 【女子シングルス】優勝 漆崎真子(体育3年)

全日本学生バドミントン選手権大会 10/18～24 千葉県ポートアリーナ

柔道部

■ 第55回全国国立大学柔道優勝大会 優勝(9連覇)

■ 2013夏季ユニバーシアード競技大会

【男子73^{kg}級】3位 西山雄希(体育4年) 【男子81^{kg}級】優勝 永瀬貴規(体育2年)

■ 平成25年度関東学生柔道体重別選手権大会

【男子81^{kg}級】優勝 永瀬貴規 【男子90^{kg}級】優勝 小林悠輔(体育2年)
 【女子70^{kg}級】優勝 松延祐里(体育3年) 【女子78^{kg}級】優勝 菅原歩巴(体育4年)

平成25年度全日本学生柔道体重別優勝大会 11/2,3 ベイコム総合体育館

平成25年度講道館杯全日本体重別選手権大会 11/9,10 千葉ポートアリーナ

剣道部

■ 第62回関東学生剣道優勝大会 男子団体 第3位

第32回全日本女子学生剣道優勝大会 11/10 春日井市総合体育館

第61回全日本学生剣道剣道優勝大会 11/4 日本武道館

サッカー部

■ 第16回茨城県サッカー選手権 優勝(3年連続8度目)

(天皇杯全日本選手権に3年連続27回目の出場)

平成25年度全日本大学サッカー選手権大会 12/14～25 国立競技場

漕艇部

■ 第40回全日本大学選手権大会 男子ダブルスカル 第2位

第36回東日本新人選手権漕艇大会 10/20 戸田ポートコース

第54回全日本新人選手権大会 10/25～27 戸田ポートコース

陸上競技部

■ 2013年度日本学生陸上競技個人選手権大会

【男子三段跳】優勝 松下翔一(院2年)
 【女子100mH】優勝 相馬絵里子(体育4年) 【女子三段跳】優勝 剣持早紀(体育1年)

■ 第82回日本学生陸上競技対校選手権大会

男子／【3000mSC】優勝 津田修也(体育2年)
 【走高跳】優勝 戸邊直人(体育4年) 大会タイ記録
 【走幅跳】優勝 嶺村鴻汰(体育3年)／【ハンマー投】優勝 保坂雄志郎(体育4年)
 女子／【100m】優勝 世古和(体育4年)／【100mH】優勝 相馬絵里子
 【4×100mリレー】優勝 中野瞳(院1年)・相馬絵里子・世古和・清山ちさと(体育4年)
 【やり投】優勝 久世生宝(体育1年) 大会新記録

■ 第90回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会

10/19 陸上自衛隊立川駐屯地 → 立川市街地 → 国営昭和記念公園

■ 第31回全日本大学女子駅伝対校選手権大会

10/27 仙台市陸上競技場 → 仙台市役所市民広場

ダンス部

■ 第26回全日本高校・大学ダンスフェスティバル

大学創作コンクール部門 文部科学大臣賞(総得点 第1位)3年ぶり10回

体操部

■ 世界ラート競技選手権大会2013

高橋晴彦(H24修了)【個人総合】優勝(日本人初) 男子種目別【跳躍】優勝 田村元延(院1年)【個人総合】2位 男子種目別【跳躍】2位 【斜転】優勝 【団体】第2位 高橋晴彦、田村元延、堀口文(院1年)

■ 第9回全日本学生ラート競技選手権大会

自由演技の部／【女子斜転】優勝 松浦佑希(体育3年) 準優勝 小出奈実(体育4年)
 【男子斜転】優勝 安高啓貴(エシス4年) 準優勝 相原奨之(体育3年)
 【女子跳躍】優勝 松浦佑希 【男子跳躍】優勝 安高啓貴 【女子直転】優勝 松浦佑希
 【男子直転】優勝 安高啓貴 準優勝 北島瑛二(体育2年)
 規定演技の部／【女子総合】優勝 松浦佑希 準優勝 小出奈実
 【男子総合】優勝 安高啓貴 準優勝 相原奨之
 団体／優勝 筑波大学Aチーム(安高啓貴・小出奈実・松浦佑希・相原奨之)



ストリートダンスサークル「REAL JAM」 カッコよさをストイックに追求!!

ストリートダンスは1960年代以降のアメリカで、黒人たちの路上のダンスとして発生したもので、数多くのジャンルがある。2011年度から、小・中・高における体育のカリキュラムにストリートダンスの「HIPHOP」と「LOCK」が導入されたことで、ぐっとポピュラーになった。

創部17年目、部員数約100名のストリートダンスサークル「REAL JAM」(三輪佳宏顧問)では、7つのジャンルに分かれて練習している。いろいろなジャンルのスキルを導入できる、自由度の高いダンス「HIPHOP」。LOCK(鍵)という名の通り、素早い動きから止まる動きが特徴の「LOCK」。床でアクロバティックな動きをする「BREAK」。筋肉をはじいたり、体を流動化して回

したりと、不思議な動きが特徴の「POP」。ハウスミュージックとともに生まれ、リズムに合わせてステップを駆使して踊る「HOUSE」。バレエの流れを受けてできた「JAZZ」。そして、腕を大きくしならせて踊るのが特徴的な「WAACK」。

新入部員のほとんどは初心者で、新歓祭での先輩のショーケース(ダンス演目)や、45分間のジャンル体験などを参考にして、5月末までに各自のジャンルを決める。

「基本的には1人1つのジャンルをずっとやります。大学から始めても8月には舞台に立てますよ」と湊信之介部長(理工学群 社会工学類3年)。



湊 信之介 部長

Information

筑波大学には、約40の文化系サークルが所属する「文化系サークル連合会(文サ連)」と、約30の芸術系サークルが所属する「芸術系サークル連合会(芸サ連)」という、大学公認の学生組織があります。このコーナーでは、こうした文化系・芸術系サークルによる公演や、学園祭などのイベント情報、各種表彰・コンテスト結果などをお知らせします。(詳細は下記ホームページをご参照ください)

【文化系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

【芸術系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>



活動は火・木曜の週2回(1E棟)。火曜日は外部のインストラクターを招いてのレッスン、木曜日はジャンル毎に分かれての練習がある。その他、土・日には、古武道場で自主練習を行う。

練習は本番の華やかさと違い地味だ。身体の部位を個別に動かすといった地道な練習を根気よく続ける。「曲を変えたりして、なるべく楽しくできるように工夫していますが、練習は、みんなあまり好きじゃないです(笑)。でも、それはどのスポーツでも同じですよ。人前で踊る時は最高です」。

イベントの度に、ジャンルの中で話し合いをして4~8人のチームを作り、チーム単位で選曲から振付け、構成、練習を行う。イベント前になると、上記の練習に加え、3A棟前の空きスペースで連日深夜まで練習するという。

活動のメインとなるイベントは、年2回開催する「REAL JAM」主催の「メルナイト」と「雙峰祭」でのステージ発表。「メルナイト」は、今まで学内で開催していたが、8月11日に開催した第31回「メルナイト」は、茨城大学や宇都宮大学など6つの大学のストリートダンスサークルを

招き、「CLUB GOLD」(土浦)で開催した。「初の試みで、準備はとても大変だったし、不安もありましたが、開催日が近づくとつれてREAL JAMとしての団結力も生まれ、イベントは大成功でした。他大学の学生と交流ができ、互いにより刺激になってよかったです」とのこと。

現在は「雙峰祭」に向けて猛練習中だ。

コンテストとバトル

練習量や目標を自由に決められるのも、同サークルの魅力。大学の友達に披露できるくらいでいいという部員もいれば、外部の大会での勝利を目指す部員もいる。

外部の大会は、2つのタイプに大別でき、ショーケースを競う「コンテスト」と、1人対1人や2人対2人で交互に踊り、即興のダンスのできを競う「バトル」がある。作り上げたショーケースで競うコンテストとバトルでは、ダンス

の勝負といっても全く違い、好みが分かれるところ。湊部長は、その場の勢いで踊るのが好きで、バトルによく出場するという。「参加は自由だが、ダンス勝負には、ステージ発表とは違う緊張や喜びがある。部員には積極的に外のいろいろな大会に出てほしい」と願っている。



雙峰祭

第39回 筑波大学学園祭 本年度テーマ「つくばれっと」
11/2~4日(場所/本学内)

混声合唱団

第38回定期演奏会
12/15 (場所/ノバホール) 15:00開演
前売り券400円、当日券500円(全席自由)

合唱団むくどり

第33回定期コンサート
10/23(場所/つくばカピオ) 19:30開演

吹奏楽団

第70回定期演奏会
12/6 (場所/ノバホール)
【受賞】第19回関東吹奏楽コンクール・大学の部 金賞



界遺産に登録されている観光名所で、桃の花が美しい春、湖面を蓮の花が彩る夏…どの季節も、どんな天気でも、それぞれ違う味わいの素晴らしい景色が楽しめます。中国には、西湖を称える詩や言葉がたくさんあり、人々はその美しさを誇りに思っています。

豊かさが生み育てた 中国屈指の文化・芸術

中国の国土は広大なので、各エリアで気候や文化、人々の気性が全然違います。西の方の人は、気候が乾燥しているので「怒りっぽくせつかち」などといわれますが、浙江省あたりは豊かで、気候も温暖なので、「落ち着いていて、勤勉で、やさしい」というイメージがあります。細かいところに気を使う人が多いですね。治安も中国で一番よいといわれています。ずっと昔から豊かな地域だったため、文化や芸術も発達していて、有名なものがたくさんあります。その中から、私が特に好きなものをご紹介します。

無形文化では越劇です。浙江省の伝統的な演劇で、歴史的な物語を、中国古代の衣装で歌ったり踊ったりして表現します。大学生くらいまではよく観劇に行っていましたし、いつも音楽プレーヤーで歌を聞き、自分でも歌ったりしていました。

工芸品では、絹の扇子を集めています。熟練した職人の作品は高価で手が出ませんが…。浙江省は「絹の故郷」ともいわれていて、絹の服や工芸品がいろいろあります。



また、青田県の「青田石雕」という色鮮やかな石の彫刻や、龍泉市の「龍泉青瓷」という青磁器も好きです。どちらも高価なので数多くは持っていませんが、家には、縁起ものの青田石雕の置物を飾っていますし、「龍泉青瓷」の食器を使っています。

6月はヤマモモ、9月は毛ガニ

杭州には、「東坡肉」や「西湖酢魚」など、歴史的な由来のある名物料理があります。こういう料理は手間がかかるので、自分では作らず、お店に食べにいきます。日本の中華料理店でも食べられますが、日本人の口に合うように工夫してあるので、本場の味とはちよと違いますね。

自分では、温州のシンプルな料理をよく作ります。野菜や魚介類を蒸したり、煮たり。米酢や黒酢といったお酢をたっぷり使い、後は塩を少々。醤油や砂糖、香辛料、うま味調味料などはあまり使いません。

つくばにいて恋しくなる食べ物といえは毛ガニです。日本では「上海蟹」と呼ばれていますが、浙江省でも獲れます。身がたっぷりあって、カニ味噌もおいしい時期は9月。毛ガニを蒸して、生抽（中国の醸造醤油）とお酢で食べます。生抽は、日本の醤油に比べると塩辛い味。日本の醤油は、私には甘過ぎて苦手です。

もう一つは、6月が旬の楊梅（ヤマモモ）。大きさは品種によって違いますが、一番大きいものは卓球のボールくらいで、甘酸っぱくてとてもおいしい果物です。

6月、9月頃に浙江省に行く機会があったら、ぜひ味わってみてください。



紹興酒(黄酒)

龍泉青瓷(青磁器)

青田石雕



Homeland

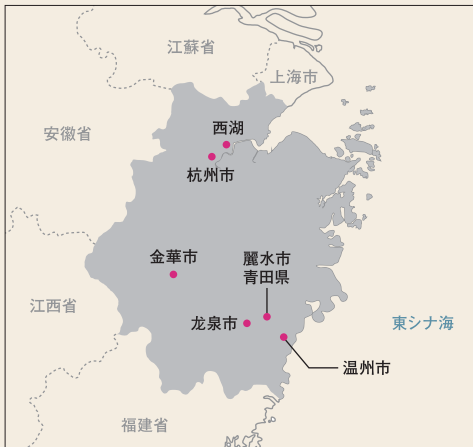
本学には、80を超える国から、約2千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、
食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。

中国
浙江省



ジョ ビケツ
徐 微潔 さん

所属:人文社会科学部 文芸・言語学専攻
趣味:旅行・読書



上有天堂、下有蘇杭

「上有天堂、下有蘇杭」(天には極楽があり、地には蘇州・杭州がある)という中国で有名なことわざがあるように、浙江省周辺は、豊かで景色もよいことから古くから「地上の天国」といわれてきました。

私は、浙江省の麗水市青田県で育つて、杭州市にある浙江師範大学で7年間学び、金華市にある浙江師範大学で日本語を教えていました。今、夫と子どもは、私の両親と金華で暮らしています。日本に来た時に2歳だった息子は6歳になりました。

まだ小さな子どもと離れて暮らすのはつらいです。でも中国は皆共稼ぎで、職場も女性に対して厳しいので、単身赴任をする女性は珍しくありません。特に大学教員は学位などが必要なので、家族も私も仕方ないと思っています。それに、ただの田舎教師では終わりたいという自分自身の夢の実現でもあります。

浙江師範大学は、中国で二本の指に入るレベルの大学で、キャンパスの広さは、二を争います。杭州とつくばは同じような気候で、広々としたキャンパスも似た感じなので、初めて筑波大学に来た時にも驚きはありませんでした。違いは、筑波大学の緑は自然のままという感じですが、浙江師範大学の緑は手入れが行き届いた庭のように整っているところですね。大学はそのために10人くらいの職人を雇っていて、木を刈り込んだり、季節ごとに花を入れ替えたりします。

浙江師範大学にはキャンパスが6つあり、私が通った紫金港キャンパスは西湖のほとりにあったので、湖の周りをサイクリングしたり、景色を眺めながら軽食を食べたりしました。西湖は、世



浙江師範大学



浙江師範大学学生宿舎



浙江師範大学紫金港キャンパス

TOPICS



「なでしこサッカー教室つくば」を開催

7月7日、本学第1サッカー場で、筑波大学開学40周年記念事業として「なでしこサッカー教室つくば」が開催されました。同教室はサッカー女子日本代表の「なでしこジャパン」で活躍して

いる安藤梢選手(人間総合科学研究科博士後期3年)、熊谷紗希選手(体育専門学群4年)、「ヤングなでしこ」の猶本光選手(同2年)が講師として参加しました。また、男子サッカー日本代

表でドイツ1部リーグのaintラハト・フランクフルトでプレーする乾貴士選手がサプライズゲストとして登場しました。近隣の小中学生約400人が参加し、ドリブルやリフティング、シュートなどを練習した後、4選手を交えてのミニゲームを行いました。得点を決めた子供と選手がハイタッチするなど、世界を舞台に戦う選手らと汗を流しました。最後に、選手のサイン入りボールやユニフォームなどが当たるじゃんけん大会や握手会なども実施。子供たちは始終目を輝かせ、梅雨明けの猛暑の中、盛会のうちに終了しました。



永田学長が田村厚生労働大臣を表敬訪問

7月26日、本学の永田恭介学長、五十嵐徹也副学長・理事(附属病院長)が田村憲久厚生労働大臣を表敬訪問しました。今回は、筑波大学の世界に

誇る最先端研究や附属病院を紹介するために訪問したもので、永田学長から、特に「つくば国際戦略総合特区の拠点大学」として取り組んでいるライフ

イノベーション分野の、生活支援ロボット「HAL」の実用化や次世代がん治療(BNCT:ホウ素中性子捕捉療法)の開発実用化などの現状を説明し、意見交換が行われました。田村大臣からは、ロボットスーツ「HAL」に高齢者・要介護者の医療用ロボットとして期待を寄せていること、また、附属病院が日本の地域医療を支える病院として頑張ってもらいたいとのコメントがありました。



左から永田恭介学長、田村憲久厚生労働大臣、五十嵐徹也副学長



鹿島アントラーズFCと連携協定を締結

8月3日、茨城県立カシマサッカースタジアムにおいて、株式会社鹿島アントラーズFCと地域連携・活性化に向けた連携協力に関する協定を締結しました。本学から永田恭介学長、鹿島アントラーズFCから井畑滋代表取締役社長が出席しました。

永田学長は、「特別講義や社会学類開設の総合科目等において、講義を実施し、相互の交流を深めてきたところであり、今回の協定を契機に、更に両者が確固たる枠組みのもとで、

共同研究や共同事業を進展させ、本学の研究成果等を社会に役立てる機会をいただいたことに感謝申し上げます」と述べました。

井畑代表取締役社長からは、「筑波研究学園都市の中核を担う筑波大学に対し、鹿島アントラーズもまた鹿島臨海工業地帯の中核を担ってきた住友金属の流れを汲むチームで、両地域のシンボリックな存在となっている両者の提携には、大きな意義があると考えており、両者による共同研究や



試みが地域活性化につながればと思う」との発言がありました。

また、本協定に付随して、鹿島アントラーズのホームゲーム時に本学のピッチ看板を掲出することになりました。



カシマサッカースタジアムに掲出した本学のピッチ看板

ネットワーク衛星「結」応援キャラクターデザイン&コミュニケーションアプリアイデア入賞作品の表彰式を開催

8月24日、まつりつくば2013 筑波研究学園都市50周年記念特別企画のひとつとして、ネットワーク衛星「結」応援キャラクターデザイン&コミュニケーションアプリアイデア入賞作品の表彰式が、つくば市ノバホールで行われました。

表彰式には、公募で選ばれた応援キャラクターデザインとコミュニケーション

アプリアイデアの受賞者24名のうち14名が出席し、審査委員長の大田友一副学長と、市原健一つくば市長、下村裕司JAXA参事より、各賞が授与されました。また、応援キャラクターデザインの入賞作品は、会場となったノバホールのホワイエで展示され、多くの方にご覧いただきました。

最優秀および優秀作品に選ばれた応援キャラクターデザインとコミュニケーションアプリアイデアは、今後、「結」プロジェクトチームによってさまざまな形で展開され、応援活動の場で随時、披露される予定です。



▲ 応援キャラクター「ゆいぬ」のぬいぐるみ
▶ 応援キャラクター最優秀賞に選ばれた小中大地さん



地域貢献

地域再生のまちづくりを高校生の視点から 「いわき・筑波大学高大連携プロジェクト」



筑波大学は東日本大震災後、福島県いわき市との間で復興支援のための連携協定を結び、地域再生に向けたさまざまな取り組みを行っています。そのひとつが、大澤義明教授（システム情報系）らのグループが実施する「いわき・筑波大学高大連携プロジェクト」です。大澤教授は、学内の有志の教員とともに、震災直後から被災地の高校で出張講義などの教育支援を続けてきました。今回のプロジェクトは、こういった活動の延長線上にあります。

このプロジェクトでは、これからのいわき市のまちづくりを担う高校生の力を引き出し、彼ら自身が能動的に考え、地域活性化のアイデアを提案することを目的に、筑波大学の教員と学生、およびいわき市が協力してワークショップを開催しました。

ワークショップには磐城桜が丘高校と磐城高校の生徒42名が参加し、7月に、いわきとは対照的なつくば市のまちづくりを見学、そして8月にはいわき市で3日間にわたって、講義・まちあるき・グループワークなどを行いました。大学教員や学生から都市計画で使われる科学的な分析手法などを学び、さらに市の職員に説明を受けながら市内を歩いてみると、見慣れた街の中にも気づかなかった発見があり、地域の課題も見えてきました。その上でグループワークを行い、「若い世代と地元商店街」「自然・歴史・文化による活性化プラン」「健康・安心・安全のまちづくり」「戦略的ブランディング計画」の4つのテーマについて、まちづくりの提案をしました。

特にグループワークでは、最初はおとなしかった生徒たちも、自分たちが住みたい街について議論を進めるうち、次第に積極的に発言するようになっていきました。「できるだけ高校生の自発的な討論に任せるよう心がけました。各グループの提案に対しても活発な質疑応答があり、真剣にまちづくりを考えてくれたと思う」とTAのリーダーを務めた大学院生の益子原歩さんは振り返ります。

参加した磐城桜が丘高校の小林俊一先生も、「内向的だと思っていた生徒が、校外の人たちから刺激を受けて創造力や表現力を発揮し、劇的に変化しました。地元への理解も深まり、とても有意義な体験だったと思います。ぜひこれからも続けて欲しい」と、この活動を通して引き出された生徒たちの潜在的な力に驚いています。

まちあるきやグループワークは、都市計画のプロセスでは頻繁に行われますが、そこで重要なのはファシリテーターの



存在です。今回はTAの学生が各グループのファシリテーターとなり、どんな意見も尊重し、高校生自身に考えさせるように促す工夫をしました。大澤教授は、「ファシリテーターの経験は、ディスカッションのスキル向上や、責任感の自覚を持つ機会になり、学生も大きく成長します」と、大学としての教育効果も認めています。

ワークショップの最後に発表されたまちづくり提案の中には、いわき市内の川沿いエリアの活用や、ゆるキャラの展開など、高校生ならではのユニークな発想がたくさん詰まっていました。これらの提案は筑波大学学園祭で行われる「高大連携シンポジウム」(11月4日)やいわき市にて開催される「いわき市まちづくり復興シンポジウム」(12月22日)などの場で、まちづくりの専門家やいわき市長にも披露されることになっています。高校生たちは引き続き、プレゼンのブラッシュアップに取り組んでいるとのこと。さらなる成長ぶりが楽しみです。



受賞 Awards and Prizes

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
平成24年度公益財団法人三徳庵 茶道文化学術助成表彰	石塚修准教授(人文社会系)	_____
平成25年度全国発明表彰発明賞	長瀬博教授(国際統合睡眠医科学研究機構)	_____
2013年度資源地質学会 研究奨励賞	池端慶助教(生命環境系)	_____
日本ドイツ学会奨励賞	村上宏昭助教(人文社会系)	_____
Coral Reefs Best Paper Award 2012	Agostini Sylvain助教(生命環境系)	_____
第32回「温泉関係功労者」環境大臣表彰 日本地下水学会「地下水学術賞」	田中正特命教授(中国事務所長、名誉教授)	_____
ポール・サバティエ大学 「Docteur Honoris Causa(名誉博士号)」(フランス)	関口章教授(数理物質系)	_____
2013国際ナノ構造材料物理・技術会議 Young Scientist Award –Best Oral Presentation–	都甲薫助教(数理物質系)	_____
日本進化学会研究奨励賞	中野裕昭助教(生命環境系、下田臨海実験センター)	_____
日本科学教育学会科学教育実践賞	尾嶋好美(生命環境エリア支援室) および筑波大学 SS リーグ運営委員会	_____
2013年度日本液晶学会論文賞A部門	齋藤一弥教授(数理物質系) 山村泰久准教授(数理物質系)	_____
第29回(2012年度)日本認知科学学会大会発表賞	藤桂助教(人間系)	_____
第39回太陽電池国際会議(39th PVSC) Best Poster Award	馬場正和 (数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻 博士後期1年)	末益崇教授(数理物質系) 都甲薫助教(数理物質系)
2013 SPRUC Young Scientist Award	伊藤啓太 (数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻 博士後期3年)	末益崇教授(数理物質系) 都甲薫助教(数理物質系)
NIMS Conference 2013 Best Poster Award	全家美(数理物質科学研究科 ナノサイエンス・ナノテクノロジー専攻 博士後期1年)	中村潤児教授(数理物質系)
日本化学会第93春季年会学生会講演賞 新規素材探索研究会奨励賞 第60回毒素シンポジウム 毒素シンポジウム奨励賞	平山裕一郎(数理物質科学研究科 化学専攻 博士後期3年)	木越英夫教授(数理物質系)
第48回 有機反応若手の会 優秀ポスター賞	渡邊駿平(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期1年)	市川淳士教授(数理物質系)
第82回全国盲学校弁論大会関東・甲信越地区大会2位	村田明由(附属視覚特別支援学校高等部 普通科1年)	_____

※所属、職名、学年は受賞時

附属中学校
養護教諭
近藤とも子さん

元気の源はテニスです。テニスを始めたきっかけは、中学2年生対象の林間行事における登山対策でした。「体力、持久力には少々難あり」ですので、その対策は急務でした。テニスの腕は? という、あまりの下手さに絶句することもしばしばですが、始めてみるとその面白さの虜に。最近ではテニスの合間の仲間たちとのコミュニケーション(おしゃべり)も楽しみの一つになっております。80歳を過ぎてなお現役プレイヤーのお仲間がおり、その方を目指して長〜く楽しんでいけたらと思っております。決して無理はせずに…。



筆者 左から3人目

今回は、附属駒場高等学校養護教諭の早貸千代子さんです。
「いつも元気で前向きな早貸先生。その笑顔に癒される人も多いのではないかと思います。私もそのひとりです」

教育推進部社会連携課
山田なほみさん

我が家には現在、家猫6匹、外猫6匹計12匹のニャー達が住んでいます。前に夫が、本コーナーで外猫を紹介しました。今回は第2弾で家猫の登場です。家猫といってもみんな同じ所にいるわけではありません。2匹が1階のリビング、1匹が2階、残りの3匹が車庫の2階です。私の朝は大忙しです。それぞれにエサを与え、トイレを掃除して、病気の猫にはクスリを飲ませます。そのせいで夫・息子のことは後回しです。しかし、こんなに手のかかるニャー達でも、手足伸ばしてお腹出して、幸せそうな顔して寝ている姿には癒されます。



今回は、教育推進部特命教授の大嶋建一さんです。
「いつも元気を分けてもらっています。花や野菜作りの名人でもいらっしゃいます」

リ シ ー イ ッ セ イ



連携・渉外室
古山陽一さん

倭は国のまほろば。毎年、秋は奈良に出掛けています。かつては古寺が中心でしたが、最近は飛鳥や山の辺の道もまわります。甘樫の丘に登ったり、古墳近くの柿畑を歩いたり、残っているのは石組みや礎石ばかりで、伝来の建築はほとんどありません。記紀の記憶の中を歩いています。奈良の魅力は、たたなづく青垣山隠れる限られた空間をゆっくりと面で移動できることでしょうか。京都ではこうはいきません。交通機関で点から点の移動になってしまいます。夜は奈良市内に戻って、志津香の釜飯か梁山泊で春鹿を酌む、倭しうるはしの瞬間です。



奈良からの帰りはいつも宇治の平等院に寄っています。
ミュージアムショップが素敵です。

今回は、体育系准教授の嵯峨寿さんです。
「独身時代にはふたりで危ない橋も渡りました」

生命環境系教授
磯田博子さん

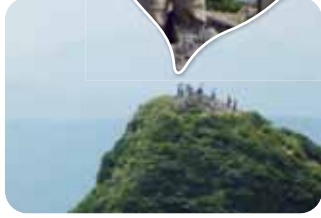
パリのレストラン「Truffles Folies」(37, rue Malar 75007 Paris)をご紹介します。パリ・7区のMalar通りにある「Truffles Folies」は訳すと「トリュフばか」といったところ。メニューにはトリュフをふんだんに使った様々な料理を連ねており、お値段も手頃です。お薦めは「ゆでたジャガイモと青野菜のトリュフクリーム添え」です。料理と一緒に出されるトリュフ味のオリーブオイルをフランスパンに付けて食べるのもとても美味しいですよ。近くにはpave生チョコで有名なMichel Chaudanもあります。



今回は、数理解物質系准教授の山本洋平さんです。
「今回ご紹介したパリのレストランTruffles Foliesにご一緒したトリュフ友達です」

附属久里浜特別支援学校教諭
後藤健さん

山に囲まれて育ったので、小さいときから海より山が好きで、よく登っていました。おかげで、時々山が恋しくなると、山に登っています。今夏は、昨夏天候悪く行けなかった八ヶ岳の赤岳と、谷川岳に行ってきました。今回は天気にも恵まれ、無事に行ることができました。晴れていれば、山頂からは辺りを見下ろし、遠くを眺めることができます。自然の音と風に包まれると、日々の雑多な世界から離れられます。下山時には一度頭をリセットでき、新しいことを考えられるようになることが心地よく、時間と天気を見ながら次の計画をしています。



今回は、附属視覚特別支援学校教諭の嶋俊樹さんです。「夏の筑波大学免許法認定公開講座と一緒に補助員を務めました。勉強熱心な方です」

人文社会系助教
山田亨さん

8月のお盆休みを利用して、以前住んでいた中国の青海省に3年ぶりに行ってきました。四川料理、アムド・チベット料理、回族料理と種類豊富な食べ物を久しぶりに堪能し、充実した時間を過ごせました。「開発」の合言葉のもとさまざまなものが変化していることを実感しつつも、人々の変わらない心の温かさに癒されました。標高3,500メートルを超える高地への久々の訪問だったため体調を崩さないか多少心配でしたが、日ごろの運動のおかげもあり無事に毎日を楽しめました。帰国後も、留学生センター近く中華料理「西安」にお邪魔しては、中国西部の料理を食べて充電をしています。



今回は、北アフリカ研究センター(生命環境エリア支援室)の小屋一平さんです。「日頃から爽快な笑顔。公私ともに多方面でお世話になっております」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

体育系准教授
鍋山隆弘さん

私の専門は剣道です。東京大学七徳堂(剣道場)に訪れた時に2人の東大剣道部OBを紹介されました。一人は東大医科学研究所特任教授の上昌広氏、もう一人は予備校講師の藤井健志氏。上氏は相馬市、南相馬市の医療支援を、藤井氏は大学受験教育支援を行っているとのことでした。上氏の提案で相馬市の中高生を対象に剣道講習会を行うことになりました。同行してくれることになった藤井氏は同級生。私が中学時代に全国大会の準決勝で戦った相手でした。彼はその後進学校へ進み東大へ、私は剣道の強豪校へ進み筑波大へ。相馬への道中は中学時代の話、進学受験の話等最高に盛り上がりました。相馬高校での講習会で相馬市の現状を知り、また何か協力できればと思っています。



今回は、人文社会系助教(留学生センター)の鈴木華子さんです。「学生生活支援室と一緒に仕事している。英語なまりのチャームिंगな先生です」

社会人大学院等支援室
熊谷暁彦さん

「夏!といえばプール!」という小学生的本能に従って、今年の夏は泳いでばかりいました。早起きして家事を済ませ、スポーツクラブでたっぷり泳いだ後サウナで汗を流し、サーティワンのオレンジソルベを食べながら図書館まで歩いていると、「これが正しい夏休みかー」と妙に感慨深くなって楽しいです。余談ですが、先日その図書館で毛ガニより毛深い「ケブカガニ」なるカニがいることを知りました。しかしケブカガニ科でありながら毛がないカニがいて、名前を「スベスベケブカガニ」というらしいです。それはもう普通のカニなのでは?



「寝っ子と」

今回は、人間エリア支援室の木村美里さんです。「飲み会での気配りが上手な、素敵な女性です。地元も筑波って、若手では彼女しか知りません。郷土愛でしょうか」

※所属、職名は2013年9月現在



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[茗溪会とは] 一般社団法人茗溪会(江田昌佑理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする社団法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会が支援する学生団体の活動から 地域に貢献する活動の紹介

茗溪会は、今年で9回目となる学生活動支援助成金の目録贈呈式を、7月4日に筑波大学長応接室において行いました。引き続き、総合交流会館において西川副理事長から各団体等の代表者(13団体・1個人)に支援助成金決定通知書を手渡しました。支援助成金が決まった団体等の事業は別表のとおりですが、各団体から茗溪会に頂いたレポートの中から、特に筑波大学生が地域に出かけて尽力している3団体の活動を取り上げ、抜粋して紹介します。

筑波レガッタ

筑波レガッタには4人で1チームとしてどなたでも自由にご参加いただけます。現在は筑波大学関係者や土浦市の地域の方にご参加いただいております。良き交流の場となっております。

大会は男子の部、女子の部、男女混合の部の3部に分かれており、それぞれの部で1位から3位までのチームには賞状と賞品を贈呈しております。賞品は土浦市やつくば市の特産品を贈らせていただいております。大会は1レース約300mの距離を4人で力を合わせて漕ぎます。レースは2、3艇ごとのトーナメント方式で、1チームあたり3、4レース漕ぐことになります。レースではナックルフォアという艇を使います。これはボート選手が使用している競技用ボートとは異なり、レクリエーション用に考案された安定性の高い安全なものです。4人の漕ぎ手と1人の舵取りが乗ります。舵取りは安全のため部員が務めます。漕ぎ手は1人1本ずつオールを持ち、舵取りの掛け声に合わせて漕ぎ進めます。4人の息が合った瞬間のスピード感や一体感は言葉では言い尽くせないような気持ち良さがあります。4人の息がぴったり合わなければ体験できない感覚です。これがボート競技の醍醐味でもあります。皆さまにそのような体験をしていただけるよう、部員も張り切って声を掛けさせていただきます。



学び場さくら塾

学び場さくら塾は“大学生が運営する無償の塾”です。一般の学習塾とは異なり成績を上げることを第一の目的としてはいません。筑波大生である我々が、地域のお兄さんお姉さんとして子ども達と関わることを通して、「筑波大学と地域をつなぐ」ことを理念に掲げています。

現在、さくら塾は週3回つくば市内の小・中学生および高校生を対象に指導を行っています。毎週火曜日は春日交流センター、毎週金曜日は桜県営アパート集会場、毎週土曜日は台坪ふさとコミュニティセンターで活動をしています。生徒数は全校舎合わせて30人程度、学生講師は15人程度で運営しています。普段の活動以外にも、つくば市の栗原小学校の先生方の協力を得て、小学校で金環日食観測会を行ったり、地域のお祭りであるテクノパーク桜まつりにブースを出して理科実験教室を行ったり、机の上だけでなく実際に自然と触れ合って勉強をするために夏期合宿を行ったりしています。



ふるさとつくば ゆいまつり

学生の手により、地域づくりのための祭りを企画しているのが「ふるさとつくば ゆいまつり」です。実行委員会は今年度で結成3年目を迎え、2014年3月8日開催予定の第3回に向けて本格的に始動しています。

ゆいまつり当日の核となる企画については、「プロジェクトチーム」を立ち上げ、ブラッシュアップしていきます。また、アドバイザーである地域の方々や出演者・出展者の方々の意見を取り入れるため、毎月1回のゆいまつり総会を開催し、活動報告や意見交換を行っています。将来的には実行委員会だけでなく、つくばに住んでいる方が協力して創り上げる祭りを目指しています。

前回、開催当日は市内外から12,000人以上の来場者が訪れ、老若男女問わず地域の交流の場となりました。アンケートでは、「結婚してつくばを離れたが、家族も一緒に里帰りできるきっかけがあって嬉しい」といった声が聞かれました。



別表

- ①ハイブリッドロケットエンジンの開発、液体ロケットエンジンの開発【宇宙工学研究会】/②体育会所属団体の応援活動、スポーツ・デーなど学内行事の広報活動【応援部WINS】/③第39回筑波レガッタ【漕艇部】/④第51回筑波大学ダンス部公演【ダンス部】/⑤第6回筑波学生文芸賞【筑波学生文芸賞運営委員会】/⑥ハイブリッドロケット及び小型模擬衛星の開発【筑波大学宇宙技術プロジェクト】/⑦星空野球教室【筑波大学大学院野球コーチング論研究室】/⑧ロボットコンテスト参加に向けた活動及び地域貢献【つくばろぼっとサークル】/⑨「SAVING10,000～自殺者1万人を救う戦い～」上映会 in 筑波大学【希死回生～自殺予防のための啓発活動～】/⑩第3回 ふるさとつくば ゆいまつり【ふるさとつくば ゆいまつり 実行委員会】/⑪第39回筑波大学学園祭「雙峰祭」【平成25年度筑波大学学園祭実行委員会】/⑫学び場さくら塾【学び場さくら塾】/⑬大竹海岸の海水浴シーズン中の監視救助活動【ライフセービング部】/⑭アジアロープスキッピング選手権大会及び世界ロープスキッピング選手権大会出場【黒野寛馬・人間総合科学研究科】

【 】内は団体名、または個人名

茗溪会のつくば公開講座

シリーズ藤原教授の英語の話 第8弾

「ことわざから探る英語圏の文化」

日時：11月16日(土) 14時から
会場：筑波研修センター(大学循環バス「メディカルセンター」下車10分)
要旨：ことわざには民衆の生活の知恵が凝縮されています。では、日英のことわざの相違は何を反映しているのでしょうか？



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[紫峰会とは] 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業(奨励金の支給など)、学生生活支援事業(緊急貸付金、コピーサービスなど)、広報・普及事業(紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など)です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。



1998年の雙峰祭にて、紫峰会奨励金目録の贈呈



1978年の学園祭より



1979年のスポーツ・デーより

紫峰会 始まりの物語

開学当時の課外活動

開学間もないころ、土曜日になると、「筑波大学学生宿舎前」のバス停には大きな荷物を持った多くの学生が、土浦行きバスを待っていました。東京教育大学の先輩たちと泊まりがけで練習し、試合に出場するためです。当時の道路状況はかなり悪く、晴れの日には土ぼこりが濛々と立ち、雨の日には泥沼になるようなでこぼこ道をバスは走っていました。バスの後、鉄道を乗り継ぎ、約3時間かけて東京教育大学体育学部がある幡ヶ谷へ向かいました。帰りの最終バスは「満員電車よりも混んでいた」と言われるほどでした。このような筑波と東京の「二重生活」は、時間的にも経済的にも学生にとって大きな負担となっていました。

経済的な負担は、文化系、芸術系のサークルも同じでした。練習や活動場所が足りず、活動に不可欠な楽器なども不足していました。大学は練習施設や、サークル館などの建設を進めていましたが、移動費や楽器の購入費など、直接金銭の支援を行うことはできませんでした。

紫峰会(筑波大学学生後援会)の設立

こうした「二重生活」を目の当たりにした学生担当教官室や体育系の顧問の先生方の中から「大学の外に後援会を作って(課外活動への)金銭的な援助」を求める声があがりました。学内での議論を経て、財団法人筑波学都資金財団などの協力を受け、1977年7月15日に紫峰会が設立されました。課外活動団体の組織化も並行して進み、同年9月に三系(文化系サークル連合会、体育会、芸術系サークル連合会)が正式に発足しました。

設立時、紫峰会の運営は学生担当教官室の先生方が行っていました。奨励金の支給にあたっては、三系の代表者が話し合っていました。初年度は、ほぼ体育会所属団体のみでの支給となりましたが、2年目以降は、文サ連、芸サ連の代表者たちが徹夜で作成した資料を持ち寄り、ひざを突き合わせて、激論を交わしていく中で、各系が納得できるように金額を決めていきました。このような姿は今でも健在です。

紫峰会の学生支援は、このようにして始まったのです。



1999年のリーダー研修会にて

Media Appearances

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(2013年7月~9月)

新聞記事一覧

	記事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	開学40周年のイベントとして、サッカー女子日本代表で活躍する本学在学学生らによる「なでしこサッカー教室つば」を開催。約400人の小中学生が参加	安藤梢(人間総合科学研究科 博士後期3年) 熊谷紗希(体育専門学群 4年) 猶本光(同2年)	毎日・産経・茨城・常陽(7.8) 東京(7.11)
2	サッカー女子日本代表で活躍する本学在学学生ら、いわき市の中小高校3校を訪問し、被災地の子どもたちを励ました	安藤梢(人間総合科学研究科 博士後期3年) 猶本光(体育専門学群 2年)	読売(7.9)いわき民報(7.10)夕 福島民報(7.11)
3	ユニバーシアード夏季大会(ロシア・カザン)柔道男子81kg級永瀬貴規が金メダル獲得	永瀬貴規(体育専門学群 2年)	産経(7.9)読売(7.9)夕 茨城・朝日・毎日(7.10)
4	「国際情報オリンピック」で、熊崎剛生さんが金メダル、隅部壮さんが銀メダルを獲得	熊崎剛生(附属駒場高校3年) 隅部壮(同2年)	読売(7.13)日本経済(7.13)夕
5	ユニバーシアード夏季大会(ロシア・カザン)、テニス女子シングルスで、石津幸恵が金メダル獲得	石津幸恵(体育専門学群 3年)	朝日・毎日・読売・ 日本経済・産経・常陽(7.17)
6	矢作直也准教授らは、薬局での簡単な血液検査で、潜在的な糖尿病患者のチェックが可能と発表	矢作直也准教授(医学医療系)	日本経済(7.17)夕
7	本学は、料理レシピサイトを運営するクックパッド社と提携して、糖尿病患者らに向けた献立を作り、無料公開を始めた。現在10日分30食を公開中	矢作直也准教授(医学医療系)	読売(7.20)
8	本学計算科学研究センターと東京大学情報基盤センターは、両機関の次期スーパーコンピュータを設計し、共同運営・管理する組織を設置	佐藤三久教授(システム情報系・最先端共同HPC基盤施設長) 梅村雅之教授(数理物質系・計算科学研究センター長)	日刊工業・日経産業(7.23)
9	本学渡邊信教授らは、4月より、仙台市に開設した藻類バイオマスの研究開発施設で、生活排水の中の有機物で藻を育てて油を抽出・精製する研究を開始	渡邊信教授(生命環境系)	産経(7.24)
10	白岩善博教授らの国際チームは、円石藻を全遺伝子情報(ゲノム)解析。「遺伝子配列に多様性があるために、広い海域で大発生できるようだ」と発表	白岩善博教授(生命環境系)	朝日(7.25)
11	本学発ベンチャーのペアテイル(黒崎賢一社長)は、スマートフォンで買い物のレシートを撮影して送信するだけで、家計簿管理できるアプリケーションを開発	黒崎賢一(情報学群4年)	茨城(7.26)
12	「国際数学オリンピック」で、増田成希さん、野村建斗さんが銀メダル獲得	増田成希(附属駒場高3年) 野村建斗(同2年)	日本経済・東京(7.29)
13	▽悲しみに寄り添う:本学附属病院は、09年、県内で唯一も子どもを亡くした親などのための「グリーフ(悲嘆)ケア外来」を開設	田村恵美(附属病院看護部 看護師長)	読売(8.1)
14	「つくば院生ネットワーク」は、8月3日、10日、31日に、つくば駅改札口前で、「駅前キャンパス」を実施	「つくば院生ネットワーク」 角谷雄哉(人間総合科学研究科 博士後期2年)	朝日(8.2)日本経済(8.3) 茨城(8.6)
15	本学と鹿島アントラーズが、学術的提携の協定を締結。同日より、スタジアムで本学の広告看板の掲出も開始	永田恭介学長	日本経済・茨城(8.4) 朝日(8.6)常陽(8.18)
16	本学サッカー部 赤崎秀平、Jリーグデビュー	赤崎秀平(体育専門学群4年)	茨城(8.4)
17	東日本大震災の復興支援に取組む本学創造的復興プロジェクトの一環で、福島県の親子らに、芸術や科学の体験を通じてリフレッシュしてもらう催しを開催	創造的復興プロジェクト	茨城(8.5)
18	本学発ベンチャー企業のサイバーダインは、「ロボットスーツHAL」が欧州で医療機器として認証されたと発表	サイバーダイン 山海嘉之教授(システム情報系)	朝日(8.5)毎日(8.6/8.7) 読売・日本経済・産経・茨城・ 常陽・フジサンケイビジネスアイ 日刊工業・日経産業(8.6)
19	青木美菜代さんが台本を作ったテレビCMが、東京と大阪エリアで1カ月間放映される。「宣伝会議」の広告賞に入賞したCM台本が実現化した	青木美菜代(芸術専門学群2年)	朝日(8.8)
20	本学は、国際的な研究力を高める「研究力強化実現構想」を公表	計算科学研究センター 生命領域学際研究センター	日本経済(8.8)
21	本学は、8月5~7日、女子中高生対象の「夏休みサイエンス体験合宿」を開催。中学生と高校生の割合は半々で、県内外から102人が参加。気象予報士の井田寛子さんのトークショーや小林正美准教授指導の物理学実験などが行われた	井田寛子(OG NHKニュースウオッチナイン 気象予報士) 小林正美准教授(数理物質系)	日刊工業(8.8) 茨城(8.13)
22	松本正幸教授らは、ドーパミン産生神経細胞が、モチベーションの調節などの動機付け機能に関わるグループと、認知機能を担うグループに分かれていることを突きとめた。この成果は、米科学誌ニュートンに掲載される	松本正幸教授(医学医療系)	日刊工業(8.9)
23	本学の菅平高原実験センターが、文部科学省による「教育関係共同利用拠点」に認定された	菅平高原実験センター	常陽(8.13)
24	本学朝田隆教授らの研究チームは、9月より、発病前の対象者を3年間追跡し、アルツハイマー病の原因と考えられているアミロイドタンパク質の脳への蓄積状況と認知機能の変化を調査する	朝田隆教授(医学医療系)	東京(8.16)夕 産経・茨城(8.17)
25	延原肇准教授らは、無線操縦ヘリコプターによる空撮画像から、作物の生育状況を確認できるシステムを開発	延原肇准教授(システム情報系)	日経産業(8.21)
26	矢作直也准教授らの研究グループは、肝臓内に、グリコーゲンの減少を検知するシステムがあることを発見した。肥満対策の新たな治療法開発につながると期待され、この成果は、8月13日に、英科学誌ネイチャー・コミュニケーションズに掲載された	矢作直也准教授(医学医療系)	日刊工業(8.21)
27	ユニバーシアードの団体、個人で優勝したテニス女子の石津幸恵選手が、文部科学省に、スポーツ功労者として表彰された	石津幸恵(体育専門学群3年)	茨城(8.24)
28	江崎玲於奈賞が発表され、「第24回つくば賞」に林純一教授が選ばれた	林純一教授(生命環境系) 江崎玲於奈元学長 白川英樹名誉教授	読売・産経・茨城・日刊工業(9.4) 毎日(9.6)
29	附属病院が新棟「けやき棟」内に、院内助産システム「つくば市バースセンター」を開設	濱田洋実教授(医学医療系) けやき棟	茨城(9.8)
30	陸上の日本学生対校選手権で、本学女子は、5年連続23度目の優勝。男子走り幅跳びで、戸邊直人が2m28cmで優勝。女子3000m障害は、中村真悠子が10分6秒43の日本学生新記録で優勝。男子3000m障害で津田修也、女子1000m障害で相馬絵里子、円盤投げで高橋亜弓が優勝	戸邊直人(体育専門学群4年) 中村真悠子(人間総合科学研究科 博士前期1年) 津田修也(体育専門学群2年) 相馬絵里子(同4年) 高橋亜弓(人間総合科学研究科 博士前期2年)	朝日・毎日(9.9)

テレビ放送一覧

	内容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	これまで撮影できた遠方からの富士山	田代博教諭(附属高等学校)	NHK総合 「ニュースウオッチ9」(6.21)
2	院内環境をアートやデザインで改善し、患者さん等に元気になってもらう取組み	学生チーム「アスバラガス」	NHK総合 「ニュースワイド茨城」(7.8)

※所属、職名、学年は2013年9月現在

Event calendar

10 october

- 1日(火) 秋学期授業開始
開学記念日
開学40周年記念式典
- 2日(水) Tsukuba Global Science
Week 2013(~4日)
- 6日(日) 震災復興シンポジウム(鹿嶋市)
- 11日(金) 開学40+101周年記念シンポジウム
「社会とともに大学の未来を共創する
~未来構想大学のミッションの再定義~」
- 13日(日) 筑波みらいの会
(旧 筑波大学出身経営者の会)総会
- 17日(木) 大学院入学試験(10月期)
(~18日、22日、23日)
- 26日(土) 全学停電(~27日)

11 november

- 2日(土) 学園祭(~4日)
- 3日(日) ホームカミングデー
- 6日(水) 大学院入学試験(10月期)合格発表
- 12日(火) 筑波研究学園都市50周年記念式典・
講演会(開学40+101周年記念事業)
- 16日(土) 秋季スポーツ・デー(~17日)
- 20日(水) 学長主催外国人留学生懇談会
- 30日(土) 入学試験「推薦/帰国生徒(体・芸)」(~12/1)

12 september

- 1日(日) 震災復興シンポジウム(北茨城市)
- 11日(水) 合格発表「推薦/帰国生徒(体・芸)」
- 16日(月) 秋ABモジュール期末試験(~20)
- 22日(日) 震災復興シンポジウム(いわき市)
- 27日(金) 冬季休業(~1/5)



筑波大学

University of Tsukuba